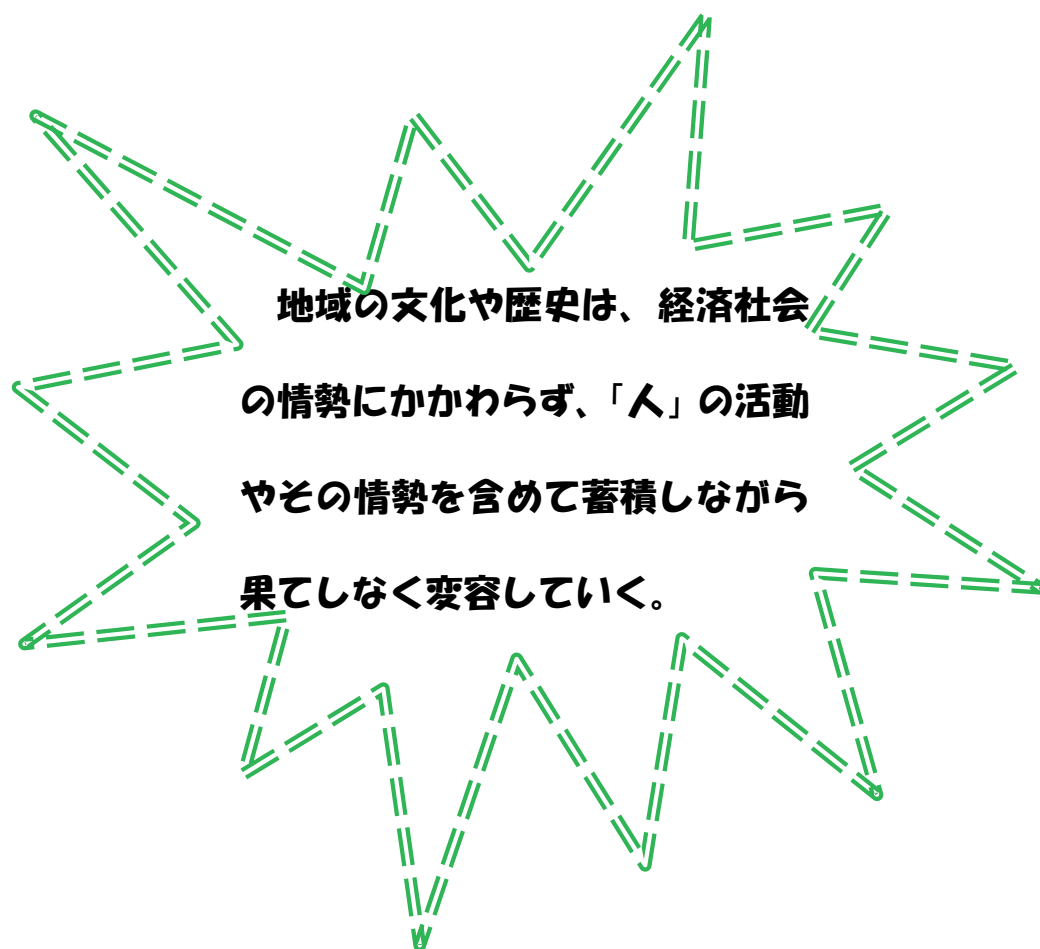


唐津・多久・大町地域周辺散策記

—歴史的遺産を通じて、現在・過去・未来を考える—

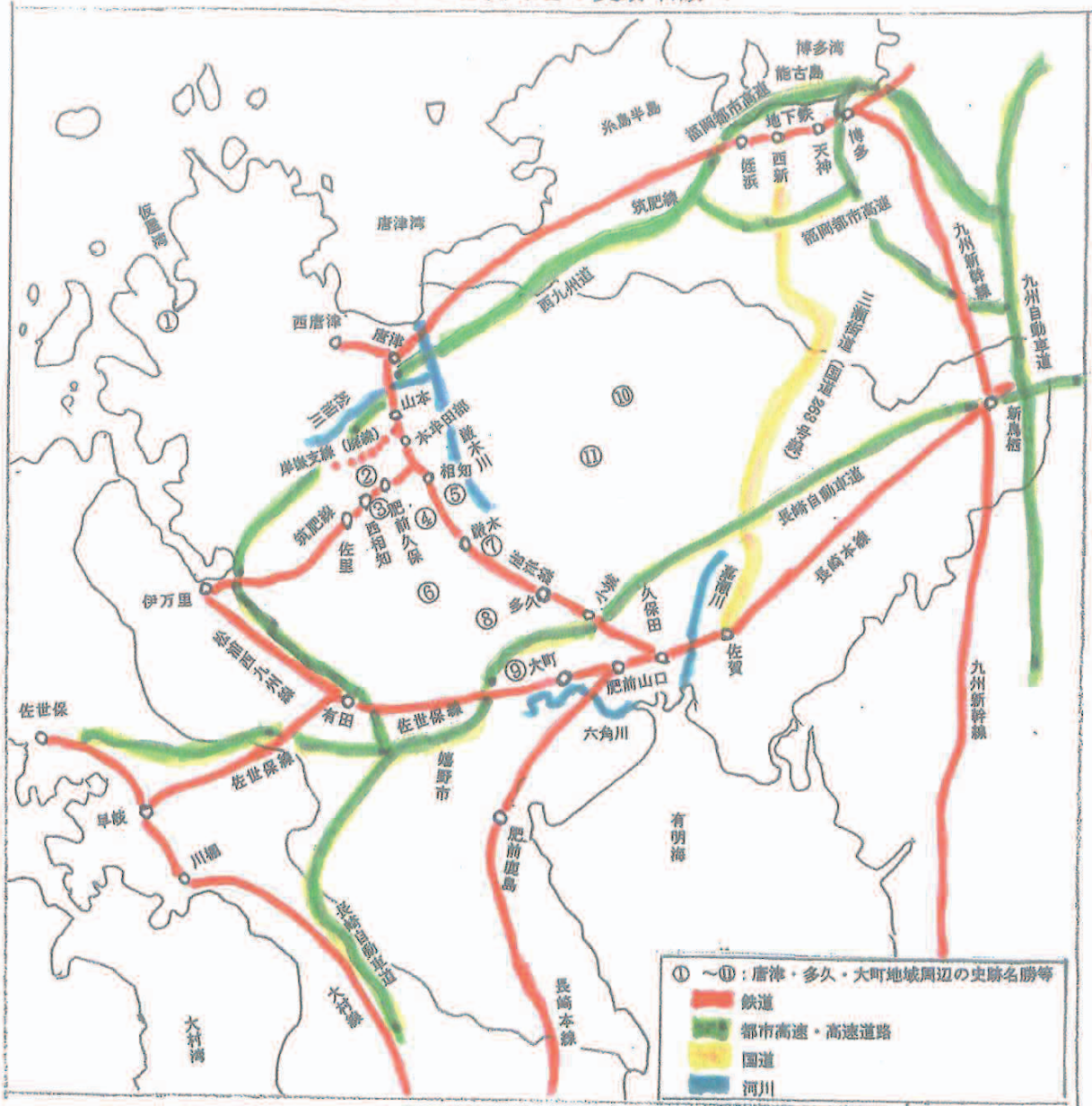
内山 敏典



本書は、過去の写真は本文中に記していますように引用させていただいています。引用以外の写真につきましては筆者によるものであります。また、本書では歴史的遺産という用語をタイトルに用い、本文では少し内容が異なります遺構という用語も用いています。その際には文化・歴史という用語とともに使用している個所もあります。

ところで、本書の書式は、唐津・多久・大町地域周辺をそれぞれ訪れた際に記録していましたものを体系化していますので、必ずしも統一化されていません。注は全体を通して付けていますし、参考文献は各章ごとに示しています。そうした点をご留意いただきましてご覧いただきますれば幸いです。

唐津・多久・大町地域周辺の史跡名勝等



- ① にあんちゃんの家記念碑
杵島炭鉱大鶴鉱業所第二坑口跡
- ② 芳谷炭鉱第三坑跡
岸嶽支線跡
- ③ 幡隨院長兵衛誕生の碑
小川原商店街跡
- ④ 鶴殿石仏
和田山動物園
和田山神社
ボタ山跡
- ⑤ 村田英雄記念館
相知駅と村田英雄記念碑
- ⑥ 藤野の棚田
太平の棚田
- ⑦ 巖木駅駅舎の中島深ギャラリー
蒸気機関車の給水塔
- ⑧ 多久駅前のホッパー
多久聖廟
高取伊好
西隣公園
三菱古賀山炭鉱跡
三菱古賀山竖坑櫓
- ⑨ 大町町八幡神社
大町町ボタ山公園
福母八幡宮
六角川
旧長崎街道の土井家住宅
- ⑩ 吉村家住宅
淀姫神社
- ⑪ 櫻原温泉

目 次

唐津・多久・大町地域周辺の史跡名勝等	ii
まえがき	1
1. 北波多、相知および巖木地域周辺の現在・過去について	7
(1) 唐津・北波多村・相知町・巖木町の過去	8
(2) 唐津・北波多村・相知町・巖木町の現在の写真	9
2. 肥前町大鶴の現在・過去について	29
(1) 肥前町大鶴の過去について	29
(2) 肥前町大鶴の現在について	30
3. 多久地域周辺の現在・過去について	33
(1) および (2) 多久市周辺の過去と現在	35
4. 大町町の現在・過去について	43
(1) 大町町の過去	45
(2) 大町町の現在	45
5. 唐津・多久・大町町地域周辺の未来	51
付録	59
佐賀市の史跡名勝およびお茶栽培発祥の地：栄西	59
著者紹介	61

まえがき

筆者はこれまで「地域の歴史」と「まちおこし」について、『早良逍遙マップ記―歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ―』（2003年）、『続 早良逍遙マップ記―鉄道跡を歩いて、未来に繋ぐ―』（2005年）、『福岡都市圏歴史散策マップ記』（2009年）、『福岡（筑前）およびその関連地域の歴史散策マップ記―とくに高取焼および元寇を例とした「まちおこし」のための文化・歴史について―』（2011年）および『旧三瀬街道とその周辺逍遙マップ記―伊能忠敬一行の測量から200年を経過して―』（2015年）を上梓してきました。そのなかの『続 早良逍遙マップ記―鉄道跡を歩いて、未来に繋ぐ―』の「第1部 鉄道が産業に果たした役割について」では、1983（昭和58）年3月22日に廃止された福岡都市部の筑肥線（博多駅⇒筑前箕島駅⇒筑前高宮駅⇒小笹駅⇒鳥飼駅⇒西新駅⇒姪浜駅）跡をウォーキングするとともに、筑肥線が果たした役割について記述しています。博多駅から姪浜駅までは1977（昭和52）年1月当時の時刻表によればキロ数11.7kmであり、筆者のウォーキングによる歩数は17,920歩でした^{注1)}。筑肥線が果たした役割を調べていくうちに、筑肥線には急行平戸（旧九十九島）が当時の鉄道の要衝であった山本駅を経由し、長崎駅まで運行していたことを思い出しました。また、1967（昭和42）年6月の日本交通公社の時刻表によると、山本駅からは当時の佐賀県東松浦郡北波多村の岸嶽駅までの唐津線岸嶽支線のキロ数は4.1kmで、列車は1971（昭和46）年8月20日まで運行されていました。このように、山本駅は唐津線本線と支線、筑肥線という鉄道の要衝でした。

現在の唐津市を走る唐津線と筑肥線は、ローカル線としての乗客が主であります。しかしながら、明治・大正・昭和40年代まで両線は石炭輸送が主でありました。現在の唐津市は、平成の大合併にもれず、旧唐津市、呼子町、鎮西町、肥前町、北波多村、相知町、浜玉町、巖木町、七山村で構成された合併都市です。旧唐津、相知町、北波多村、巖木町の唐津線と筑肥線付近の地層は古第三紀層や第三紀層であり^{注2)}、大中小の炭鉱による採炭が盛んでありました。この地層は旧唐津市の隣接である肥前町杵島（きしま）炭鉱大鶴（おおづる）鉱業所、巖木町の先の多久市、佐世保線沿線で長崎街道の大町町などもそうあります。

筆者が2015（平成27）年に半世紀ぶりに相知町周辺の地を訪れると、あまりにも大きな変容に驚きの念を否めなく感じました。筆者は2015（平成27）年3月から2016（平成28）年9月までの間に5回ほど現在の唐津市と多久市および大町町等を訪れ、炭鉱跡や史跡名勝などを調査いたしました。これらの地を訪れる前に『相知町史』、『北波多村史』および『多久の歴史』等の文献を通じて、これらの地域の歴史を調べてきました。とくに、『相知町史』には1923（大正12）年の繁栄を物語る往時の「まち図」が掲載されています^{注3)}。この繁栄した「まち図」と「現在の同地区」とを比較すると、整備がなされているものの驚くほどの炭鉱閉山後の衰退を抜けきれない状況のようでした。

これからのわが国の人口は少子高齢社会といわれていますが、表1-1のように、中位予

測では2060年に88,090(千人)で、65歳以上の全人口に占める割合は39.3%である。2016年の人口が216,198(千人)で、65歳以上の全人口に占める割合が27.4%であるので、人口は大きく減少し、高齢人口の割合が約12%増えることを示しています。この人口の減少

表 1-1. わが国の総人口、年齢3区分(0～14歳, 15～64歳, 65歳以上)別人口及び年齢構造係数:出生一定(死亡中位)推計

年次	人 口 (1,000人)				割 合 (%)		
	総 数	0～14歳	15～64歳	65歳以上	0～14歳	15～64歳	65歳以上
2010	128,057	16,839	81,735	29,484	13.1	63.8	23.0
2011	127,750	16,682	81,303	29,764	13.1	63.6	23.3
2012	127,501	16,497	80,173	30,831	12.9	62.9	24.2
2013	127,250	16,283	78,996	31,971	12.8	62.1	25.1
2014	126,948	16,065	77,803	33,080	12.7	61.3	26.1
2015	126,597	15,826	76,818	33,952	12.5	60.7	26.8
2016	126,198	15,579	75,979	34,640	12.3	60.2	27.4
2017	125,755	15,328	75,245	35,182	12.2	59.8	28.0
2018	125,270	15,090	74,584	35,596	12.0	59.5	28.4
2019	124,745	14,856	74,011	35,877	11.9	59.3	28.8
2020	124,183	14,651	73,408	36,124	11.8	59.1	29.1
2021	123,586	14,430	72,866	36,290	11.7	59.0	29.4
2022	122,957	14,193	72,408	36,356	11.5	58.9	29.6
2023	122,299	13,943	71,920	36,436	11.4	58.8	29.8
2024	121,613	13,715	71,369	36,529	11.3	58.7	30.0
2025	120,902	13,484	70,845	36,573	11.2	58.6	30.3
2026	120,167	13,237	70,346	36,584	11.0	58.5	30.4
2027	119,410	13,010	69,803	36,597	10.9	58.5	30.6
2028	118,632	12,803	69,190	36,640	10.8	58.3	30.9
2029	117,834	12,613	68,521	36,701	10.7	58.1	31.1
2030	117,018	12,440	67,729	36,849	10.6	57.9	31.5
2031	116,182	12,281	67,229	36,673	10.6	57.9	31.6
2032	115,328	12,135	66,346	36,848	10.5	57.5	32.0
2033	114,457	11,999	65,445	37,013	10.5	57.2	32.3
2034	113,570	11,871	64,496	37,203	10.5	56.8	32.8
2035	112,667	11,749	63,511	37,407	10.4	56.4	33.2
2036	111,749	11,631	62,467	37,651	10.4	55.9	33.7
2037	110,817	11,515	61,371	37,931	10.4	55.4	34.2
2038	109,874	11,401	60,234	38,239	10.4	54.8	34.8
2039	108,919	11,285	59,126	38,508	10.4	54.3	35.4
2040	107,954	11,168	58,108	38,678	10.3	53.8	35.8
2041	106,981	11,049	57,163	38,769	10.3	53.4	36.2
2042	106,001	10,926	56,293	38,782	10.3	53.1	36.6
2043	105,015	10,799	55,457	38,759	10.3	52.8	36.9
2044	104,025	10,668	54,680	38,676	10.3	52.6	37.2
2045	103,032	10,534	53,934	38,564	10.2	52.3	37.4
2046	102,037	10,396	53,244	38,398	10.2	52.2	37.6
2047	101,041	10,254	52,562	38,225	10.1	52.0	37.8
2048	100,046	10,110	51,879	38,057	10.1	51.9	38.0
2049	99,051	9,964	51,206	37,881	10.1	51.7	38.2
2050	98,057	9,816	50,565	37,676	10.0	51.6	38.4
2051	97,064	9,668	49,966	37,430	10.0	51.5	38.6
2052	96,072	9,520	49,381	37,171	9.9	51.4	38.7
2053	95,081	9,373	48,816	36,891	9.9	51.3	38.8
2054	94,089	9,228	48,276	36,585	9.8	51.3	38.9
2055	93,096	9,085	47,754	36,257	9.8	51.3	38.9
2056	92,101	8,946	47,239	35,916	9.7	51.3	39.0
2057	91,103	8,810	46,702	35,591	9.7	51.3	39.1
2058	90,102	8,679	46,167	35,257	9.6	51.2	39.1
2059	89,098	8,552	45,595	34,951	9.6	51.2	39.2
2060	88,090	8,431	45,016	34,642	9.6	51.1	39.3

各年10月1日現在人口。平成22(2010)年は、総務省統計局『平成22年国勢調査による基準人口』(国籍・年齢「不詳人口」をあん分補正した人口)による。

(資料) 国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口(平成24年1月推計)―平成23(2011)年～平成73(2060)年―』<http://www.ipss.go.jp>

は生産の担い手や消費の担い手不足となり経済循環におきまして、縮小再生産の経済になりかねません。このマクロ経済システムの再構築には政府による政策に期待せざるを得ません。

人口減少の激しい都市に北海道夕張市があります。夕張市は2007（平成17）年3月6日353億円の赤字をもって財政再建団体に指定されています。表1-2のように、夕張市の最多人口である1960（昭和35）年の116,908人から2015（平成27）年の9,968（外国人を含む）人と約107,000人の人口減少となっています。この53年間で年平均成長率は-4.5391%と大きな負のパーセンテージです。2016年9月29日に借金時計を夕張市ホームページにアップし再生計画を市民等に知らせ、また市民への情報公開がおこなわれています。そして、メロン栽培を中心とした農業、精密機械や食品加工業、石炭の歴史および映画などの観光産業などでの観光客増加の促進をしています。ところで、表1-2は夕張市の123年間^{注4)}の人口の推移を示し、とくに石炭産業がない時代や、その産業が盛んな時代よって人口がどのように変容しているかを見ることができます。

現在の唐津市（巖木町、相知町、北波多村）、肥前町大鶴および大町町は、炭鉱の閉山による人口減少という点で夕張市の状況と似ていると思われます。表1-3は筆者が手に入れることが可能なデータです。相知町、北波多村、巖木町および大町町の1955（昭和30）年それぞれの人口は19,350、16,647、10,808 および22,400人でありました。相知町、北波多村および巖木町の2004（平成16）年それぞれの人口は5,435、8,908 および4,657であり、49年間の平均成長率はそれぞれ-2.5582%、-1.2680%および-1.7035%で、大町町の2012（平成24）年の人口は7,112人で、57年間の平均成長率は-1.9926%でありました。これらの町村は夕張市の平均成長率より負の成長率が小さくなっていますが、それでもかなりの人口減少率を示しています。全国的にいえることですが、人口減少はシャッター商店街の増加、流通システムの縮小、鉄道旅客の減少による運行数の減少、物流輸送の停滞および社会インフラの整備の遅れなど悪循環を繰り返していくことになるでしょう。このような悪循環は租税収入の減少に繋がり、国や地方それぞれの予算の縮小となるものと思われま

ところで、唐津市の都市部と、旧巖木町、旧相知町および旧北波多村の農村部（旧産炭地）との発展には格差があります。本書は、これらの町村に加えて同様の経済社会状況であります肥前町大鶴、大町町および多久市の現在、過去および未来について考えていきたいと思っています。

注1) 『続 早良逍遥マップ記—鉄道跡を歩いて、未来に繋ぐ—』(2005年) 16頁.

注2) 『相知町史 下』 23~26頁.

注3) 同書 604頁.

注4) 複利計算式上の期間

表 1-2. 夕張市の人口の推移 (世帯：数、人口：人)

西暦	年次	世帯数	人口	女	男	
1891	明治24年	69	307			北海道戸口表
1892	明治25年	109	511			北海道戸口表
1893	明治26年	688	1231			公簿調査による常住人口
1894	明治27年	1252	2007			公簿調査による常住人口
1895	明治28年	1118	2388			公簿調査による常住人口
1896	明治29年	1205	2575			公簿調査による常住人口
1897	明治30年	266	860			公簿調査による常住人口
1898	明治31年	1465	3972	2484	1488	公簿調査による常住人口
1899	明治32年	1363	6922	3697	3225	公簿調査による常住人口
1900	明治33年	1527	10954	4622	6332	公簿調査による常住人口
1901	明治34年	1999	10976	6937	4039	公簿調査による常住人口
1902	明治35年	2337	9848	5610	4238	公簿調査による常住人口
1903	明治36年	2702	7505	4107	3398	公簿調査による常住人口
1904	明治37年	2823	9669	5332	4337	公簿調査による常住人口
1905	明治38年	2798	11632	6467	5165	公簿調査による常住人口
1906	明治39年	4025	18142	10079	8063	公簿調査による常住人口
1907	明治40年	5214	23463	13951	9512	公簿調査による常住人口
1908	明治41年	6786	10334	5469	4865	公簿調査による常住人口
1909	明治42年	7531	29208	17165	12043	公簿調査による常住人口
1910	明治43年	6875	21462	11987	9475	公簿調査による常住人口
1911	明治44年	7725	23207	13506	9701	公簿調査による常住人口
1912	大正元年	6984	22745	13530	9215	公簿調査による常住人口
1913	大正2年	6126	26253	14258	11995	公簿調査による常住人口
1914	大正3年	7192	28068	15005	13063	公簿調査による常住人口
1915	大正4年	8482	32538	18991	13547	公簿調査による常住人口
1916	大正5年	8597	32826	19832	12994	公簿調査による常住人口
1917	大正6年	8652	35325	19112	16213	公簿調査による常住人口
1918	大正7年	9427	37642	21098	16544	公簿調査による常住人口
1919	大正8年	11111	45315	26959	18356	公簿調査による常住人口
1920	大正9年	10840	51064	27340	23724	調整施行年
1921	大正10年	10473	50769	27114	23655	国勢調査
1922	大正11年	9476	44530	23779	20751	公簿調査による常住人口
1923	大正12年	9636	44994	23546	21448	公簿調査による常住人口
1924	大正13年	9599	44595	23179	21416	公簿調査による常住人口
1925	大正14年	9855	48697	26193	22504	国勢調査
1926	昭和元年	9608	47463	25557	21906	常住世帯の実査による推計人口
1927	昭和2年	9713	47983	25837	22146	常住世帯の実査による推計人口
1928	昭和3年	10110	49944	26893	23051	常住世帯の実査による推計人口
1929	昭和4年	10245	50611	27252	23359	常住世帯の実査による推計人口
1930	昭和5年	10271	51967	27266	24701	国勢調査
1931	昭和6年	8619	43526	22840	20686	常住世帯の実査による推計人口
1932	昭和7年	7854	39563	20713	18850	常住世帯の実査による推計人口
1933	昭和8年	8092	40863	21443	19420	常住世帯の実査による推計人口
1934	昭和9年	7410	39934	20727	19207	常住世帯の実査による推計人口
1935	昭和10年	8109	42508	22144	20364	国勢調査
1936	昭和11年	8125	42605	22195	20410	常住世帯の実査による推計人口
1937	昭和12年	8245	48375	25467	22908	常住世帯の実査による推計人口
1938	昭和13年	10356	57306	30287	27019	常住世帯の実査による推計人口
1939	昭和14年	11433	62791	32681	30110	常住世帯の実査による推計人口
1940	昭和15年	11582	64908	35983	28925	国勢調査
1941	昭和16年	12521	72053	40706	31347	常住世帯の実査による推計人口
1942	昭和17年	12518	62201	31082	31119	常住世帯の実査による推計人口
1943	昭和18年	12499	73953	42308	31645	市制施行年
1944	昭和19年	12503	75010	42817	32193	人口調査による現在人口
1945	昭和20年	12707	74665	41572	33093	人口調査による現在人口
1946	昭和21年	12906	68523	35001	33522	人口調査による現在人口
1947	昭和22年	15141	82123	43812	38311	臨時国勢調査
1948	昭和23年	16797	92577	49997	42580	常住人口調査
1949	昭和24年	18342	97077	52006	45071	常住人口調査
1950	昭和25年	19359	99530	52337	47193	国勢調査
1951	昭和26年	19490	100555	52158	48397	常住人口調査
1952	昭和27年	22296	103485	53393	50092	住民登録人口
1953	昭和28年	22470	105536	54374	51162	住民登録人口
1954	昭和29年	22667	107343	55013	52330	住民登録人口
1955	昭和30年	23221	109886	56217	53669	住民登録人口
1956	昭和31年	23659	111398	56950	54448	住民登録人口
1957	昭和32年	24128	113534	57985	55549	住民登録人口
1958	昭和33年	24333	114239	58099	56140	住民登録人口
1959	昭和34年	24944	116278	59091	57187	住民登録人口

(表 1-2 のつづき)

1960	昭和35年	25156	116908	59416	57492	住民登録人口
1961	昭和36年	24755	111608	56396	55212	住民登録人口
1962	昭和37年	23491	106804	54081	52723	住民登録人口
1963	昭和38年	22739	101669	51403	50266	住民登録人口
1964	昭和39年	22459	100292	50679	49613	住民登録人口
1965	昭和40年	21745	91183	45909	45274	住民登録人口
1966	昭和41年	20940	84078	41808	42270	住民登録人口
1967	昭和42年	21219	81453	40527	40926	住民登録人口
1968	昭和43年	21097	79577	39479	40098	住民基本台帳人口
1969	昭和44年	20761	76330	37791	38539	
1970	昭和45年	20179	72162	35628	36534	
1971	昭和46年	20114	70503	34870	35633	
1972	昭和47年	19665	67624	33363	34261	
1973	昭和48年	17368	57958	28474	29484	三菱大夕張炭坑閉山
1974	昭和49年	16330	53652	26359	27293	
1975	昭和50年	15932	51478	25392	26086	北炭平和鉱山閉山、夕張鉄道線廃止
1976	昭和51年	15732	50167	24791	25376	万字炭坑閉山
1977	昭和52年	15520	48663	24078	24585	北炭夕張炭坑新第二鉱山閉山
1978	昭和53年	15193	47027	23297	23730	
1979	昭和54年	14553	44613	22078	22535	
1980	昭和55年	14112	42483	21100	21383	北炭清水沢炭鉱閉山
1981	昭和56年	13794	40829	20350	20479	
1982	昭和57年	13309	38568	19170	19398	北炭夕張炭鉱閉山
1983	昭和58年	12427	35190	17438	17752	
1984	昭和59年	12062	33544	16662	16882	
1985	昭和60年	11835	32379	16066	16313	
1986	昭和61年	11653	31406	15570	15836	
1987	昭和62年	10786	28596	14137	14459	三菱南大夕張炭坑合理化により三菱石炭鉱業大夕張鉄道線廃止、北炭真谷地炭鉱閉山・同専用鉄道廃止
1988	昭和63年	10421	25921	12729	13192	
1989	平成元年	9983	24440	11854	12586	
1990	平成2年	9192	21824	10505	11319	三菱南大夕張炭鉱閉山
1991	平成3年	8887	20752	9986	10766	
1992	平成4年	8726	19956	9555	10401	
1993	平成5年	8534	19202	9207	9995	
1994	平成6年	8319	18535	8867	9668	
1995	平成7年	8135	17895	8564	9331	
1996	平成8年	7997	17340	8307	9033	
1997	平成9年	7814	16785	8035	8750	
1998	平成10年	7652	16221	7724	8497	
1999	平成11年	7548	15821	7550	8271	
2000	平成12年	7494	15433	7353	8080	
2001	平成13年	7408	15115	7192	7923	
2002	平成14年	7294	14719	7000	7719	
2003	平成15年	7136	14235	6771	7464	
2004	平成16年	7031	13883	6589	7294	
2005	平成17年	6906	13509	6379	7130	
2006	平成18年	6723	13045	6142	6903	
2007	平成19年	6427	12307	5783	6524	
2008	平成20年	6265	11847	5550	6297	
2009	平成21年	6159	11439	5354	6085	
2010	平成22年	6012	11012	5138	5874	
2011	平成23年	5869	10654	5005	5649	
2012	平成24年	5802	10390	4842	5548	
2013	平成25年	5600	9968	4644	5324	
	平均成長率		-4.5391	-4.6956	-4.3902	

(資料) 夕張市ホームページの人口推移(国勢調査ベース) www.city.yubari.lg.jp より作成

最多人口: 1960(昭和35)年

平均成長率: 複利計算式 $S=A(1+i)^N$ S: 複利合計、A: 元本、i: 利率、N: 期間

表 1-3. 巖木町・相知町・北波多村・大町町の人口の推移 (人)

西暦	年次	巖木	相知	北波多	大町
1955年	昭和30年	19350	16647	10808	22400
1960年	昭和35年	18370	16524	8642	20427
1965年	昭和40年	9985	12495	4900	14740
1966年	昭和41年	9433	12260	4811	14604
1967年	昭和42年	9207	11926	4740	13933
1968年	昭和43年	8867	11631	4586	13100
1969年	昭和44年	8654	11397	4488	10845
1970年	昭和45年	8647	11106	4299	10649
1971年	昭和46年	8348	11096	4237	10508
1972年	昭和47年	8139	11020	4179	10297
1973年	昭和48年	8013	10969	4207	10076
1974年	昭和49年	7768	10911	4181	10065
1975年	昭和50年	7950	10621	4174	9942
1976年	昭和51年	8127	10536	4269	9809
1977年	昭和52年	8039	10560	4451	9734
1978年	昭和53年	8014	10446	4727	9702
1979年	昭和54年	7953	10494	4844	9687
1980年	昭和55年	8056	10494	5021	9776
1981年	昭和56年	7966	10511	5128	9830
1982年	昭和57年	7863	10497	5213	9795
1983年	昭和58年	7788	10432	5279	9785
1984年	昭和59年	7701	10436	5327	9754
1985年	昭和60年	7572	10430	5273	9682
1986年	昭和61年	7588	10191	5272	9591
1987年	昭和62年	7417	10128	5276	9507
1988年	昭和63年	7319	10044	5266	9431
1989年	平成元年	7207	9988	5249	9334
1990年	平成2年	7140	9860	5222	9231
1991年	平成3年	6817	9604	5123	9141
1992年	平成4年	6705	9475	5078	9071
1993年	平成5年	6633	9349	5018	8983
1994年	平成6年	6514	9257	4940	8850
1995年	平成7年	6453	9150	4925	8778
1996年	平成8年	6204	9249	4918	8703
1997年	平成9年	6162	9146	4889	8562
1998年	平成10年	6020	9074	4882	8534
1999年	平成11年	5929	9011	4830	8500
2000年	平成12年	5834	8902	4828	8484
2001年	平成13年	5686	8880	4740	8395
2002年	平成14年	5611	8891	4726	8313
2003年	平成15年	5498	8890	4679	8204
2004年	平成16年	5435	8908	4657	8127
2005年	平成17年	—	—	—	7981
2006年	平成18年	—	—	—	7799
2007年	平成19年	—	—	—	7648
2008年	平成20年	—	—	—	7542
2009年	平成21年	—	—	—	7441
2010年	平成22年	—	—	—	7266
2011年	平成23年	—	—	—	7233
2012年	平成24年	—	—	—	7112
平均成長率		-2.5582	-1.2680	-1.7035	-1.9926

(資料)佐賀県統計協会『佐賀県の人口—佐賀県人口移動調査報告書—』より作成

本書では、筆者が訪れた以下の1.～4.の過去と現在の史跡名勝等について述べています。そして、5.においては、過去と現在の史跡名勝等を通じて、これらの周辺地域の未来(将来)についての提案をおこないたいと思います。

1. 北波多、相知および巖木地域周辺の現在・過去について

本章（１）は、石炭の積み出し港としての唐津港、松浦川、北波多村、相知町および巖木町等の唐津の過去を中島直幸・金子義弘監修（2014）『唐津・伊万里・松浦の今昔』郷土出版社の「唐津炭田の盛衰」の写真と解説を引用させていただいた。ここで引用させていただいた写真のなかには唐津市からの提供との記載があるものもある。

唐津港は唐津鉄道の開通などにより、1897（明治 30）年頃に現在の西浦地区に唐津港が移ってからは大正期にかけて国内屈指の貿易港としてとして発展したとの解説がなされている。

松浦川での石炭の川下しが江戸時代後期に石炭の積出港として松浦川河口部に港ができた。相知・巖木・北波多地区より採掘された唐津炭田の石炭は、それぞれの土場まで陸上で運搬し、そこから川舟に乗せ松浦川を下し、川舟は松浦橋付近につなぎ、近くに繫いだ団平船^{だんべいぶね}で唐津河口から姉子の瀬の沖合の大型船（帆前船^{ほまえせん}）に積み込まれていたとの解説がある。

相知町内には、相知炭鉱があり三菱鉱業の三菱相知炭鉱が採炭していた。炭坑があった和田山には多くの観光関係の建物が林立していたとのことで、石炭を積みだすための鉄道もいち早く整備され、1899（明治 32）年 6 月 13 日には巖木－山本間延伸開業し、相知駅、本山駅、巖木駅、鬼塚駅が作られ、12 月 25 日に苜原－巖木駅が延伸開業したとのことである。

唐津炭鉱の炭車（北波多村）、北波多の石炭は炭車に積まれ、岸嶽駅から山本駅を經由して大島貯炭場まで運ばれ、移出・移入されていた。唐津線には本線のほかに山本駅－牟田部－岸嶽駅間を走る岸嶽支線[1912（明治 45）年]が敷設されたが、いわゆる岸嶽支線は 1971（昭和 46）年廃止されている。

唐津炭鉱（北波多村）は、芳谷炭坑を経営する三菱資本に対抗して、住友資本が経営する鉱山であった。

相知炭鉱（相知町内）には、三菱鉱業の三菱相知炭鉱が採炭していた。炭坑があった和田山には多くの観光関係の建物が林立していた。石炭を積みだすための鉄道もいち早く整備され、相知炭鉱選炭場（この写真は相知炭鉱の選炭場）のもので、坑内から単車で積み出されてきた石炭を選り分ける作業をおこなっていた。相知和田山公園（当時の和田山には動物園を併設した公園もあり、炭坑で働く人々の憩いの場があった。

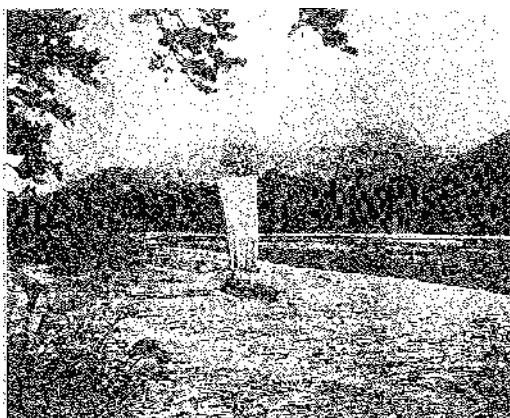
本章（２）は唐津・北波多村・相知町・巖木町の現在の写真と過去の相知町の地図である。過去に関する地図は、相知町史編さん委員会編（1977）『相知町史 下巻』の 606 頁に掲載されている「旧三菱相知炭坑略図―大正 12 年ごろ―」を参考に筆者が作成したものである。この略図等に沿って、現在の写真を撮影したものである。

(1) 唐津・北波多村・相知町・巖木町の過去

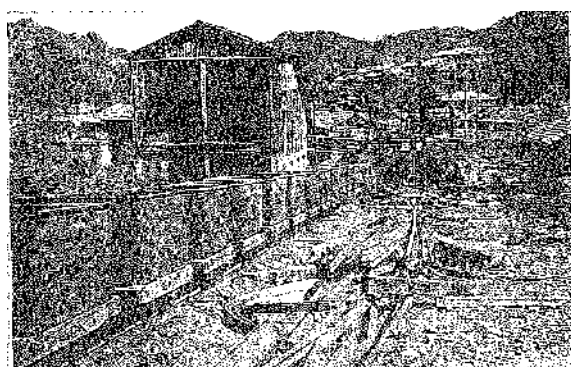
唐津・北波多村・相知町・巖木町の過去は炭鉱関連の写真である。ここでの写真の 7 枚は、中島直幸・金子義弘監修 (2014) 『唐津・伊万里・松浦の今昔』郷土出版社の「唐津炭田の盛衰」117～180 頁の写真から引用している。



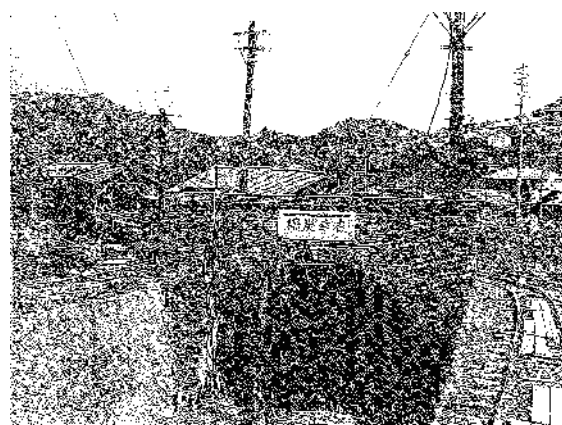
昭和初期の唐津港と三菱合資会社唐津支店



明治～大正期の松浦川での石炭川下し



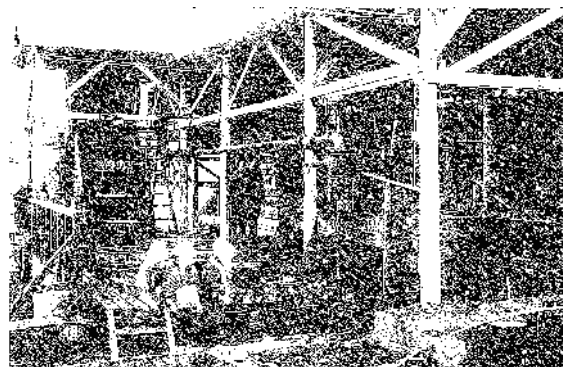
1963 (昭和 38) 年唐津炭鉱の炭車 (北波多村)



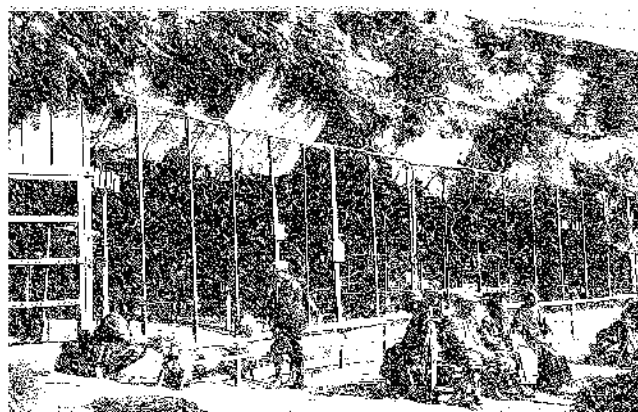
1963 (昭和 38) 年の唐津炭鉱 (北波多村)
住友資本



1929（昭和4）年ごろの相知炭鉱（三菱相知炭鉱）



1929（昭和4）年の相知炭鉱選炭場



1929（昭和4）年当時の相知和田山公園動物園

ここで引用している7枚の写真は写真のPDF(Portable Document Format)ファイルにし、それを必要部分だけ選択して、Wordに貼り付けている。以下の箇所もそのようにして引用させていただいている。

（2）唐津・北波多村・相知町・巖木町の現在の写真

現在の唐津・北波多村・相知町・巖木町の現在の写真は、広域合併がなされた唐津市の山本駅から唐津線の巖木駅までの地域周辺と、山本駅から西相知駅までの地域周辺のものである。

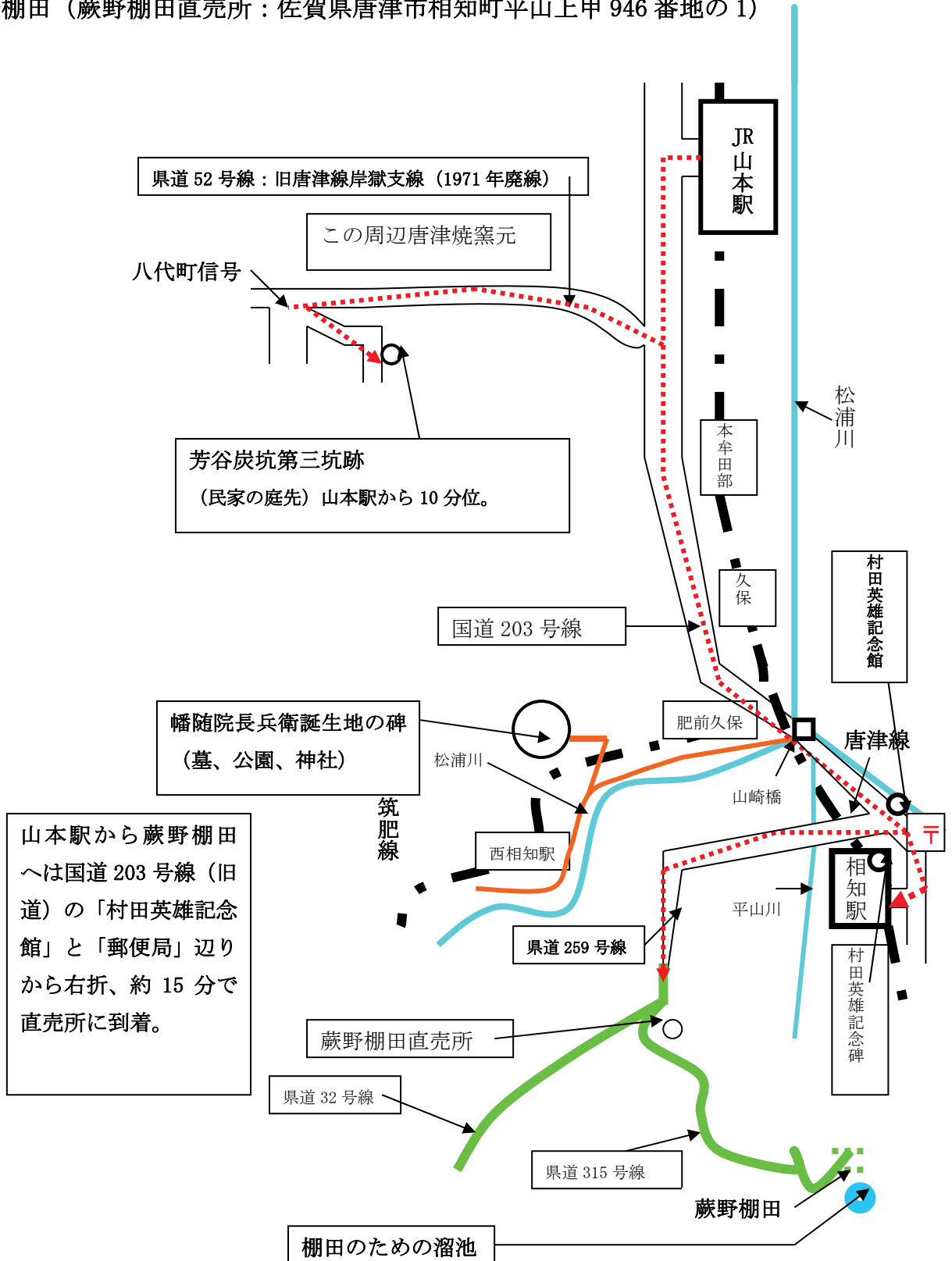
山本駅（佐賀県唐津市山本 469）

芳谷炭鉱第三坑跡（佐賀県唐津市北波多岸山 397 付近）

相知駅（佐賀県唐津市相知町相知 30-2）

幡随院長兵衛誕生地の碑（佐賀県唐津市相知町久保：現筑肥線久保駅付近）

蕨野棚田（蕨野棚田直売所：佐賀県唐津市相知町平山上甲 946 番地の 1）



山本駅

山本駅は唐津線と、山本駅を起点とする筑肥線の 2 路線が乗り入れている。ところで、筑肥線の列車は全列車が唐津線に乗り入れて唐津駅または西唐津駅始発・終着で運行される。かつては唐津線と筑肥線の唯一の接続駅で、唐津線の岸嶽支線の起点でもあったため山本駅は唐津市内の鉄道の乗換駅として賑わい、急行「平戸」も停車していたこともあり、交通の要衝であった。だが 1971（昭和 46）年に岸嶽支線が廃止されるとともに、1983（昭和 58）年には筑肥線の博多～姪浜間が地下鉄乗り入れのため、部分廃止によって唐津線と筑肥線姪浜駅・博多駅方面との接続機能は唐津駅に移行している。現在も唐津線と筑肥線伊万里駅方面との接続機能は残されているが往時の賑わいはなく、唐津市と佐賀市、唐津市と伊万里市を結ぶ 2 つの路線それぞれの中継駅としての役割となっている。

参考文献

弓削信夫『明治・大正・昭和 九州の鉄道おもしろ史』西日本新聞社. 2014 年 10 月. 230 - 257 頁.

宇都宮照信編『九州 鉄道の記憶—名列車・名場面・廃止線—』西日本新聞社. 2002 年 12 月. 32-33 頁.

宇都宮照信編『九州 鉄道の記憶—心に残る駅の風景—』西日本新聞社. 2004 年 10 月. 168 頁.

芳谷炭鉱第三坑跡

北波多村においては、享保年間（1716～1735 年）に岸山村に発掘されて以来、芳谷炭坑、唐津工業所をはじめとする大小さまざまな炭坑があったとの記述がある。そして、そこには明治 30 年代の岸岳炭鉱開発当時、1902（明治 35）年ごろの芳谷炭坑の盛況な事務所付近などの写真と北波多村全図がある。山本駅から旧岸嶽駅までは唐津線岸嶽支線が 1971（昭和 46）年に廃線となり、県道 52 号線となっている。

参考文献

北波多村村史編纂委員会『北波多村史 下巻』北波多村, 1968(昭和 38)年 4 月.

相知駅

相知駅は唐津線の簡易委託駅であるが、観光案内所がある。また、相知駅前には村田英雄記念碑がある。旧道にあり、古い昭和の名残を残しているとともに、近くには村田英雄記念館がある。村田英雄[1929（昭和 4）年～2002（平成 14）年]は現在の福岡県うきは市吉井町生まれであるが、育ちは佐賀県東松浦郡相知町佐里の演歌歌手である。日本の歌謡史に残る大歌手で、代表的な楽曲は「王将」、「柔道一代」、「人生劇場」および「無法松の一生」など数え切れないほどのヒット曲がある。

幡随院長兵衛[1622(元和 8)年～1657 (明暦 3) 年 7 月 18 日]

江戸前期の侠客であり、肥前唐津の武家出身[松浦党盟主波多参河守親（岸獄城主）^{注 5)}が豊臣秀吉の勘気につれ、波多家が滅亡したため、父塚本伊織は長兵衛を連れて江戸の向かう途中下関で病死、1 人で江戸の幡随院和尚を頼った。本名は塚本伊太郎である。江戸上の池之端幡随院の住職を師と仰ぎ、幡随院長兵衛と名乗っている。長兵衛は浅草花川戸に住み、人入れ家業を行い、旗本奴（はたもと やっこ：旗本や御家人の青年武士たちのなかで無頼化したもの）に対抗して、調整の首領として活躍したが、旗本奴大小神祇組の首領水野十郎左衛門の家で殺害された。長兵衛の任侠は巷でもてはやされ歌舞伎や浄瑠璃にて上演された。そのなかでも河竹黙阿弥作「極付幡随院長兵衛」が有名である。現在の JR 筑肥線の肥前久保駅は、北九州鉄道会社線時代（大正～昭和 12 年）において幡随院駅であったが、1937（昭和 12）年に当時の国鉄の買収によって肥前久保駅となっている^{注 6)}。

注 5) 木原武雄『風雲 肥前戦国武将史—戦国武将伝と山城散歩—』佐賀新聞社. 1995 年 1 月. 240—264 頁.

注 6) 弓削信夫『明治・大正・昭和 九州の鉄道おもしろ史』西日本新聞社. 2014 年 10 月. 246—247 頁.

参考文献

尾崎秀樹他編『新潮日本人名辞典』新潮社. 1995 年 5 月. 1414—1415 頁. 幡随院長兵衛誕生地の碑の説明板より

蕨野棚田

蕨野棚田は八幡岳（標高 763.6m）の中腹で、200～400mのところに存在する。この周辺には民家が無く、生活排水の入らない清水で育てられている。平地より気温が低く水温も低いため、生育に時間を要するとともに反当収量が 300kg と少ないが、棚田ゆえの寒暖の差と清水で品質が良く美味しい米との評判である。栽培管理として、稲を刈り取った後、藁をすべて鋤き込み、10月に菜の花の種を蒔き花が咲いたあとは鋤きこんで肥料としている。9月下旬に稲刈りを行い、自然に近い状態でモミの風乾燥を行っているとのことである。江戸期から人の手で積み上げられてきた棚田は、ため池による水の管理がなされ暗渠で下の棚田へ送水されている。蕨野棚田は「日本の棚田百選」、そしてその歴史的価値により文化庁によって「重要文化的景観」に選定されている。

参考文献

蕨野棚田保存会「棚田米「蕨野」の特徴」パンフレットより



山本駅



山本駅



山本駅構内（伊万里・久保田方面）



山本駅舎内にある路線図



芳谷炭坑第三坑口の説明板



芳谷炭坑第三坑口



芳谷炭坑第三坑口



芳谷炭坑第三坑口



芳谷炭坑跡周辺



芳谷炭坑跡周辺



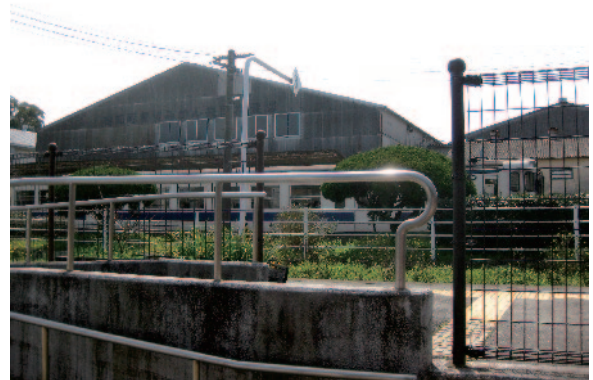
相知駅



相知駅ロータリーにある村田英雄記念碑



相知駅前
の街並みで、この道の左方面が村田英雄記念館



相知駅（唐津線）を唐津方面に発車する電車



村田英雄記念館



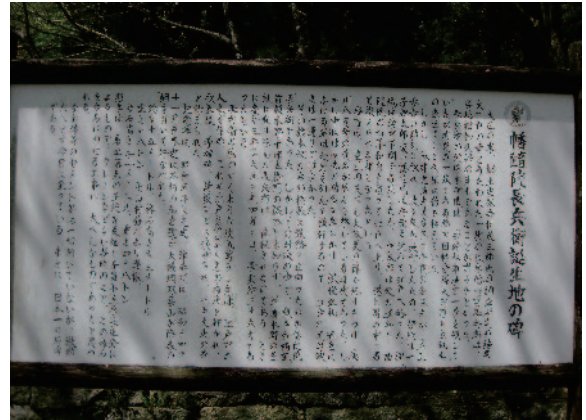
唐津線で佐賀方面へ行く電車



筑肥線西相知駅から肥前久保方面、この線路の左側が相知町町史によれば、炭坑跡としての地図が掲載されている。



肥前久保駅そばにある幡随院長兵衛誕生地の碑



幡随院長兵衛誕生地の碑の説明板



筑肥線肥前久保駅（その昔、幡随院駅）



蕨野の棚田



蕨野の棚田



蕨野の棚田



耕地整備記念碑



棚田に送水するための管理システム



大平の棚田



蕨野の棚田



蕨野の棚田



蕨野棚田の江戸期からの説明板



蕨野の集落

旧三菱相知炭坑略図（旧ボタ山の現住所、佐賀県唐津市相知町相知 2406-4 付近）

西相知駅（唐津市相知町佐里：筑肥線）

鵜殿石仏群（唐津市相知町和田：入口の一つはボタ山の社会体育館の横から）

和田山神社と動物園跡（唐津市相知町相知）

厳木駅（唐津市厳木町厳木：唐津線）

旧三菱相知炭坑

相知炭坑は、『相知町史 下巻』によれば、天徳・岩屋口・和田山各炭坑を総称したものである。そのなかで、岩屋口坑（鵜殿窟近く）は 1864（元治元）年 4 月に開坑、向定吉の経営であったが 1871（明治 4）年に休業している。また、和田山坑（鵜殿近くか、若しくは相知炭坑の坑口）は 1872（明治 5）年、田原五助が 15 人の堀子で経営していた。総称された相知炭坑は 1891（明治 24）年、1892（明治 25）年ごろに田代源二郎・内田重治・大久保武らが手をつけたが、質がわるく商品価値のない石炭であったので、大久保だけが細々と経営していた。そこへ 1894（明治 27）年 3 月に芳谷から転住して来た高取伊好が鉱区を買い取りボーリング（^{しすい}試錐）している。苦難の末、1895（明治 28）年 11 月に地底約 61m（200 尺）のところで約 91cm（3 尺）層に着炭している。ついで、1896（明治 29）年 11 月 27 日に和田山口の開坑式を行っている。1899（明治 32）年に、高取伊好は相知炭坑株式会社を組織したが、1900（明治 33）年 11 月 1 日に三菱合資株式会社に譲渡している。相知炭坑は三菱相知鉱業株式会社となっている。石炭は松浦川で西唐津港まで運んでいたが、相知線が 1905（明治 38）年が開通し、西唐津港まで運ぶこととなった。1911（明治 44）年 4 月 28 日に三菱商事会社は芳谷炭坑株式会社を買収し、1918（大正 7）年 5 月 3 日、三菱商事株式会社相知炭坑と改称している。相知炭坑の石炭の主なる仕向地は阪神・名古屋・京浜・瀬戸内海の塩田地方・上海・香港・シンガポール・西唐津港・長崎港での外国航路汽船燃料であった。なお、1918（大正 7）年の相知炭坑の事務員は 232 人、職工坑夫は 4,400 人であった^{注7}。なお、旧三菱相知炭坑略図は大正 12 年の頃のものである。

相知炭坑は 1962（昭和 37）年 7 月 26 日に閉山、佐賀県 7 炭坑は 1959（昭和 34）～1964（昭和 39）年にすべて閉山している^{注8}。

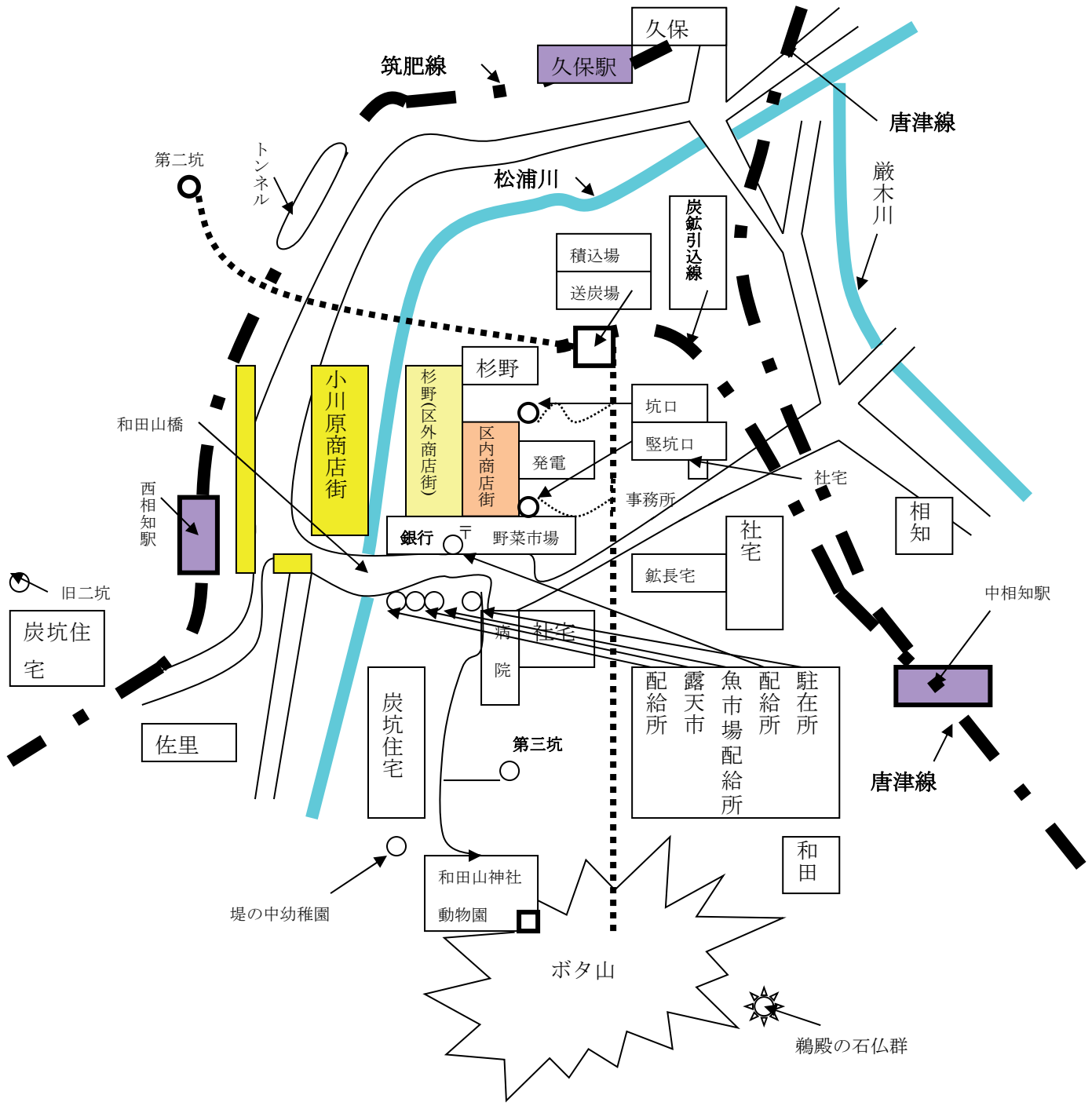
注 7) 『相知町史 下巻』の 599～605 頁.

注 8) 同書, 613 頁

参考文献

相知町史編纂委員会編『相知町史 下巻』相知町, 昭和 52 年 3 月.

旧三菱相知炭坑略図[1923 (大正 12) 年ごろ]



相知町史編纂委員会編『相知町史 下巻』相知町, 1977 (昭和 52)年 3 月. 604 頁を参照し、筆者が作成。



相知炭坑ボタ山跡、多目的施設等



ボタ山にある社会体育館の横鶴殿石
仏群の説明板（入口）



ボタ山跡



ボタ山跡

西相知駅

西相知駅は筑肥線の駅の一つで、唐津市佐里にある。最盛期は、地図にあるように、駅周辺には小川原商店街、個人商店、旅館、劇場などが立ち並んでいたとのことで、村田英雄が駅前商店街で育ったといわれている。現在の駅前には往時の面影はない。おそらく、村田英雄記念館や記念碑が相知駅やその周辺の旧道に存在しているのはそのためである。なお、西相知駅の2011年度の1日平均乗車率は11人である。



西相知駅（筑肥線）



西相知駅（久保方面）



西相知駅



西相知駅



西相知駅前



西相知駅前

鵜殿石仏群

鵜殿石仏群について、唐津教育委員会の現地の説明板によれば、806（大同元）年、空海（弘法大師）が唐より仏教修行をし、遣唐使とともに帰国した際にこの地に立ち寄り、釈迦如来・阿弥陀如来・観世音菩薩の三体の釈迦三尊を岩肌に刻んだのが鵜殿石仏群の始まりで、その後、824（天長元）年～833（天長 10）年に唐から帰朝（帰国）した常暁（常暁は平安時代前期の僧で、最澄・空海・常暁・円行・円仁・恵運・円珍・宗叡の入唐八家にっとうはっけの一人）により、鵜殿山平等寺うどのさんびょうどうじも建立されたと、1594（文禄 3）年に書かれた『鵜殿山平等寺略縁起』に記されているとのことである。現存する 60 数体の石仏の中に、空海が生存していた平安時代の石仏は一体もなく、最古のものは 14 世紀の南北朝時代の石仏で、ここには、南北朝時代から江戸時代にかけて綿々と彫られた石仏であるとのことである。

鵜殿石仏群は 14 世紀頃より山岳密教の修行場としてひらかれ、江戸時代にいたるまで栄えるとともに、中世には平等寺が、近世には、鵜殿山の麓に明王院という真言宗系の寺院も建立されていたとのことである。

このように、鵜殿山で山岳仏教が興隆した背景には、近接する丘陵地に館を構え、14 世紀の南北朝時代に相知一帯に勢力を振るった松浦党まつらとうの相知一族の保護があり、16 世紀になると、上松浦党の盟主であった波多氏などの厚い崇拜や保護があったからだということが歴史記録に残っているということである注9)。

この鵜殿窟へは、現在、ボタ山の社会体育館横から下りてゆくが、相知町和田に駐車場があるので、もともとの上り口は和田からであったと思われる。

注 9) 唐津教育委員会の現地の説明に必要な説明文に加筆している。



鵜殿石仏



鵜殿石仏



鵜殿石仏



鵜殿石仏



鵜殿石仏



鵜殿石仏

和田山神社と動物園跡

和田山周辺には相知炭坑の第三坑跡や動物園跡があり、その頂上は和田山神社と慰霊塔がある。現在の和田山神社へは曲がりくねったそして苔むした石段を 50m（感覚）登らなければならない。この上り口の近くに大きく開けた草むらがあり、ここは堤の中幼稚園跡で、炭坑住宅跡周辺ではないかと思われる。なお、和田山神社の境内の裏は動物園の跡ではと思われ、現在のボタ山に続いている。



和田山神社と動物園跡の入口
264号線の雑貨店手前を左折



左折（右側は炭坑住宅跡）し、直進した場所



直進した突き当たりで、堤の中幼稚園跡と思われる跡地



右の方の道で、登山道に石を置いた石段で、注意して上らねばならない。



和田山神社への石段



和田山神社への石段



和田山神社の鳥居が見える



和田山神社鳥居



和田山神社



奉納の碑



和田山神社社殿の写真の右端に動物園と思われる広場へ通じる道がある。



社殿の裏側の動物園と思われる広場で、現在はボタ山に通じている。

巖木駅

巖木駅がある巖木町は、炭坑の町であったが、1965（昭和 40）年岩屋炭坑が閉山している。巖木駅には、出身地であり、風の画家と称される中島潔[1943（昭和 18）年 4 月～]のギャラリーがある。また、駅の唐津線の線路の向こうに 1899（明治 32）年に作られた赤煉瓦造りの蒸気機関車の給水塔が現存している。駅舎は、給水塔と同様、1899（明治 32）年にできた駅である。なお、2011 年の 1 日平均乗車人数は 451 人である。



巖木駅の駅舎と中島潔ギャラリー



巖木駅の駅舎と中島潔ギャラリー



蒸気機関車の給水塔



巖木駅から多久駅方面へ

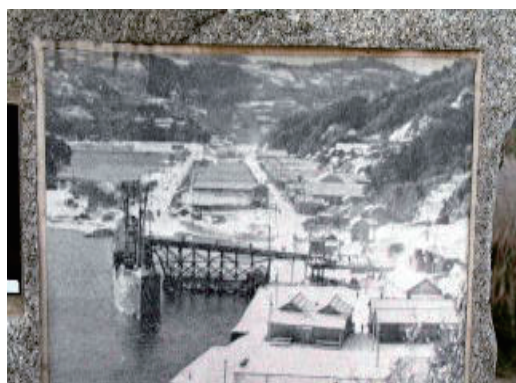
2. 肥前町大鶴の現在・過去について

旧杵島炭鉱大鶴鉱業所は佐賀県松浦郡肥前町大鶴にあった炭鉱である。1936（昭和 11）年に大鶴にあった香春炭鉱と唐津炭鉱とを杵島炭鉱が買収し杵島炭鉱大鶴鉱業所となり経営されていたが、1956（昭和 31）年 12 月に閉山している。

1960 年前後に小学生であった多くの人、学校を通じて映画館で「にあんちゃん」を観た記憶が甦るであろうし、安本末子著『にあんちゃん』を読まれた方も多であろう。この“にあんちゃん”の里が佐賀県入野村鶴牧（現在の唐津市肥前町鶴牧）である。この当時の鶴牧の人口は約 4,000 人で入野小学校の分校も存在していた。この地域の石炭という産業は第 2 次世界大戦などの戦争等というエネルギー生産などのためであった。これは、高度経済成長期が進むにつれて、石油等の安価な代替エネルギーの出現によって閉山となっている。

（1）肥前町大鶴の過去について

往時の炭鉱住宅は参考文献の安本末子『にあんちゃん— 十歳の少女日記 —』西日本新聞社のなかの佐賀新聞社の記事の写真を引用した。2004 年 7 月 31 日撮影の山肌に存在した炭住跡の写真がインターネット上に公開されているが、本書ではそれらの写真は引用していない。



往時の大鶴鉱業所風景。にあんちゃん記念碑より



往時の炭鉱住宅

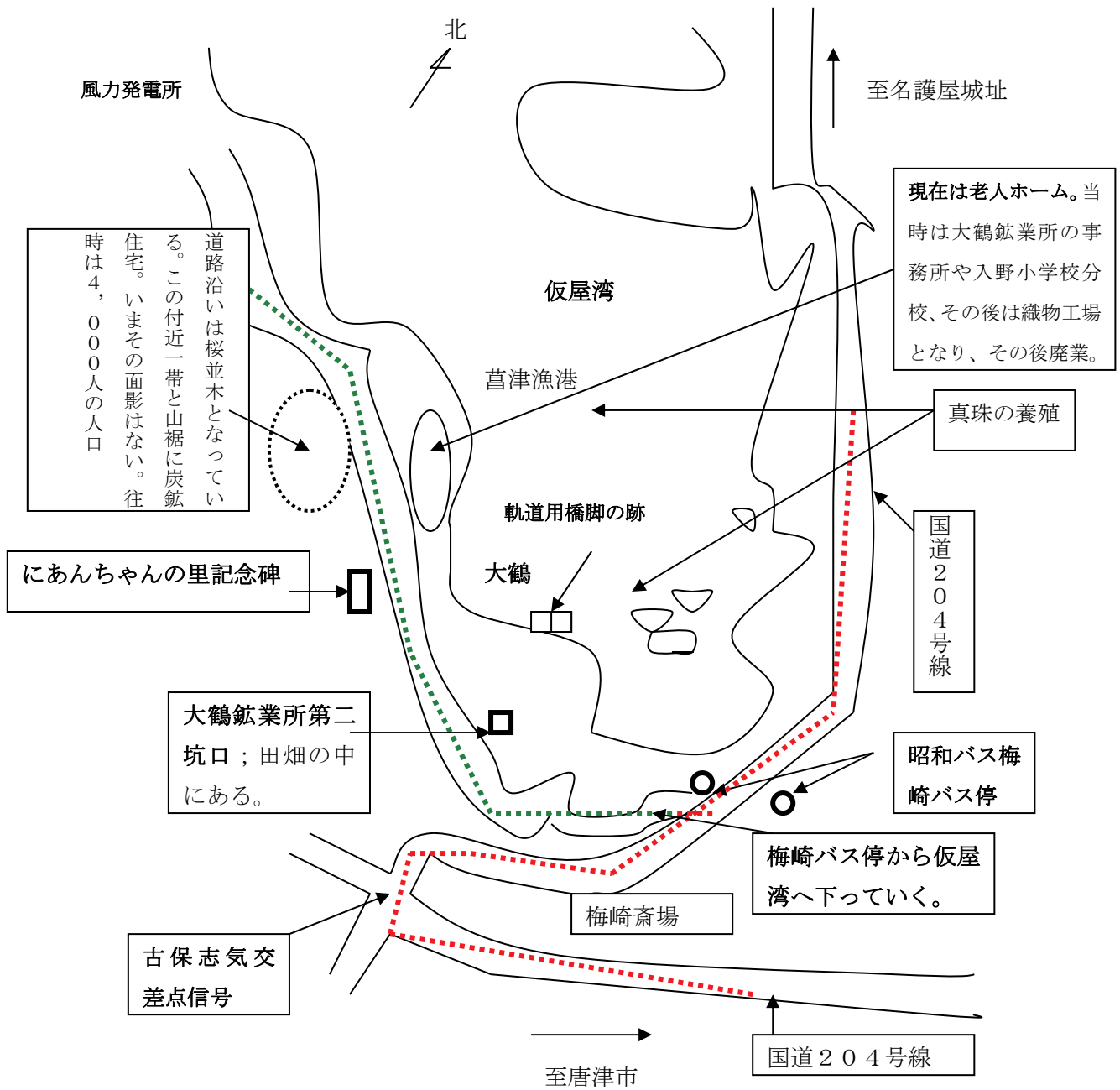
参考文献

隆慶一朗「シナリオ にあんちゃん」『隆慶一朗全集 第 6 巻』株式会社新潮社, 1996 年 4 月。
安本末子『にあんちゃん— 十歳の少女日記 —』西日本新聞社, 2003 年 6 月。

(2) 肥前町大鶴の現在について

杵島炭鉱大鶴鉱業所第二坑口跡（佐賀県唐津市肥前町大字入野甲1-3）

にあんちゃんの里記念碑（佐賀県唐津市肥前町大字入野甲付近）





にあんちゃんの里の記念碑



にあんちゃんの里の記念碑（往時の大鶴の町並み）



石炭運搬用のための起動用橋脚



石炭運搬用のための起動用橋脚



大鶴の入り江、
対岸の炭鉱時代の名残の白い跡



旧杵島炭鉱大鶴鉱業所第2坑口



旧杵島炭鉱大鶴鉱業所第2坑口



旧杵島炭鉱大鶴鉱業所第2坑口



道の右側の山に「鶴の岩屋」(洞窟内に大量の仏像のレリーフ)



旧杵島炭鉱大鶴鉱業所第2坑口



左側の山肌に炭鉱住宅が、海のある右側に老人ホーム(織物工場跡)、写真の上は菖津漁港(現在は真珠の養殖)

3. 多久地域周辺の現在・過去について

多久地域は多久駅、中多久駅および東多久駅周辺のそれぞれの三菱古賀山炭鉱、三菱古賀山炭鉱跡の記念碑および三菱古賀山炭鉱堅坑櫓、また西蹊公園内には高取伊好（たかとり これよし）像があり、多久地域には大資本の炭鉱跡と、地元資本の高取伊好の碑がある。多久駅とその周辺は整備され、近代的な駅舎とその内にはイベントホールと、駅前にはイベント広場となっておりさまざまなイベントが開催されている。この近代的な駅舎の後ろには当時の石炭を貨車に積み込むホッパー（hopper：石炭・砂利などの貯蔵層で、底開式の漏斗型の口から落下させて取り出すもの）を見ることができる。中多久駅の近くには中多久病院内に三菱古賀山炭鉱跡の記念碑および東多久駅から牛津川方面の工場敷地内に三菱古賀山炭鉱堅坑櫓がそれぞれあり、大資本の炭鉱があったことを示している。

また、多久地域に限らないが、佐賀県は鍋島藩の前の龍造寺氏の影響がかなり強く残っている。すなわち、多久聖廟は、佐賀藩二代藩主鍋島光茂の四男として生まれた多久茂文（たく しげふみ：[1669（寛文9）年1月17日～1711（正徳元）年10月で11日]）によって建立された。多久茂文は多久茂矩[たく しげのり：？～1690（元禄2）年12月10日]の養子となり、1686（貞享3）年に第四代多久邑主（たくゆうしゅ）となっている。多久茂文は教育振興を目的に、武士だけでなく農民や町民の子弟にも開放するという学問所（後の東原庵舎：とうげんしょうしゃ）を1699（元禄12）年に建て、その講堂に孔子像を安置し、1708（宝永5）年に椎原山のふもとに拝殿が完成し、現在の聖廟につながっている^{注10}。また、多久茂矩は龍造寺四家（鍋島氏により親類同格として佐賀藩に組み入れられた龍造寺一門）で、諫早鍋島家（龍造寺家晴が始祖）、須古鍋島家（龍造寺隆信の異母兄弟の龍造寺信周の子孫が始祖）、多久鍋島家（龍造寺隆信の末弟である長信の長男が多久安順で、後多久氏の祖）、武雄鍋島家（後藤家信は龍造寺隆信の三男で後藤家に後藤家の養子）の一つ後多久氏の当主で第三代多久邑主である^{注11}。このように佐賀は鍋島氏とともに龍造寺氏の影響があることが分かる。

ところで、後多久氏の祖である多久安順[たく やすとし：？～1641（寛永18）年11月28日]は、文禄の役で挑戦へ出陣した佐賀城主鍋島直茂にとともに日本へ渡って来た李参平[りさんぺい：？～1655（明暦元）年8月11日]は有田焼（伊万里焼）の祖である。李参平ははじめ鍋島直茂の重臣である多久安順に預けられ小城郡多久に住んでいる。当初は朝鮮風の陶器を製作していたとのことであるが、白磁製作を志し、鍋島領内を捜し求め1615（元和元）年有田の泉山に白磁用の土を発見し、1616（元和2）年に参平は有田に移住し上白川天狗谷の地に開窯し、白磁を焼いている^{注12}。ここから日本初の白磁器を産業として創業し、以後有田地域は日本陶業の中心となっている。多久聖廟の多久観光協会の案内所の隣に「李参平顕彰庵」がある。

多久聖廟から西の方へ行ったらところに西蹊公園があり、公園内に高取伊好像がある。高取伊好についての説明は、西蹊公園関連の写真の箇所にある。

注 10) 多久市ホームページ : <https://www.city.taku.lg.jp/main/565.html>

注 11) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 (2015/11/21 14:28 UTC 版)

注 12) 三省堂編集所『コンサイス日本人名事典 (改訂新版)』三省堂, 1999 年 10 月. 1337 頁.

(1) および (2) 多久市周辺の過去と現在

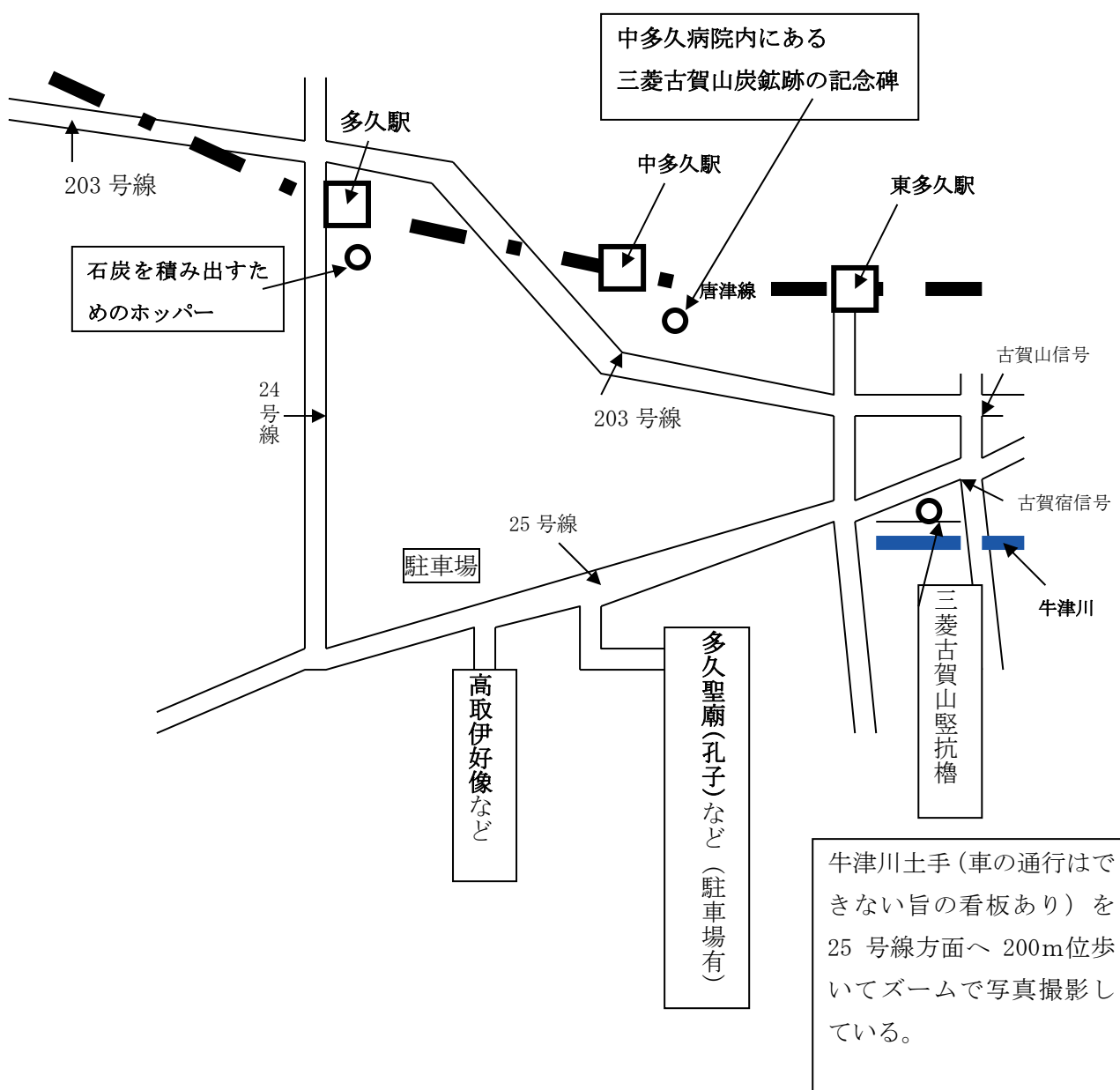
多久駅周辺の三菱古賀山炭鉱の積出施設（ホッパー）（佐賀県多久市北多久町大字小侍周辺）

三菱古賀山炭鉱跡の記念碑（佐賀県多久市北多久町多久原 2512-24 の中多久病院内）

三菱古賀山炭鉱竪坑槽（佐賀県多久市東多久町大字別府）

多久聖廟（孔子の里）（佐賀県多久市多久町 1843 番地 3）

西蹊公園内の高取伊好像（佐賀県多久市多久町 1975-1）



多久駅周辺の三菱古賀山炭鉱の積出施設（ホッパー）

多久駅前の 203 号線を中多久駅の方へ約 200m 行くと無料駐車場がある。写真はその周辺からのものである。



多久駅前のホッパー



多久駅前のホッパー

三菱古賀山炭鉱跡の記念碑

三菱古賀山炭鉱跡は中多久病院の駐車場と玄関前の中にある。



中多久病院の駐車場と玄関前の中にある交差点で、炭鉱跡のような雰囲気もある風景である。

1958（昭和 33）年の多久原炭鉱の閉山から始まり、1972（昭和 47）年に新明治佐賀炭鉱が閉山し、現在の多久市内の炭鉱はすべて閉山となっている。

三菱古賀山炭鉱堅抗櫓

東多久駅周辺の古賀山信号から牛津川の土手を 25 号線方面へ 200m位歩いてズームで写真撮影している。



ズームによる堅抗櫓



ズームによる堅抗櫓



ズームなしの堅抗櫓

多久聖廟（孔子の里）

佐賀藩第 2 代藩主鍋島光茂の四男として生まれ、のち多久茂矩の養子となり、1686（貞享 3）年第 4 代多久邑主となった多久茂文が儒学者武富咸亮（1637-1718 年）などに学び、東原痒舎・多久聖廟を 1708（宝永 5）年に創建したものである。多久聖廟は学問所の象徴として孔子を祀っている。現存する聖廟としては足利学校（栃木県）、閑谷学校（岡山県）に次ぐ古い建築物である。建築様式は禅宗様仏堂形式であり、国指定重要文化財となっている。福岡市西区能古島にも孔子廟と楷の樹がある。



多久茂文公の像



孔子像



史跡多久聖廟の石碑



多久聖廟



楷樹の説明板



楷樹



多久聖廟



東原痒舎（現在、宿泊研修所）



福岡市西区能古島にある孔子廟

西蹊公園内の高取伊好像

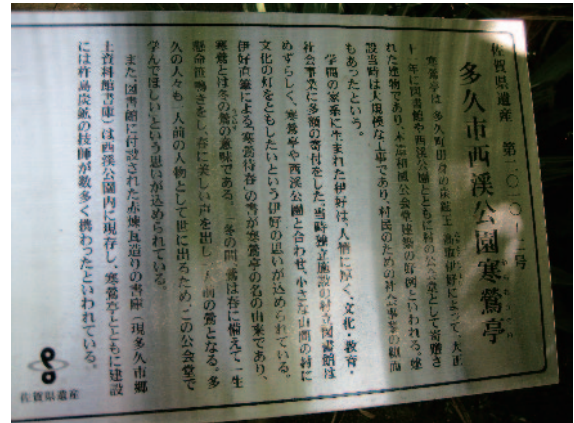
多久聖廟から 25 号線を西に約 500m行くと左に西蹊公園、右に駐車場がある。この公園は炭鉦王^{たかとりこれよし}高取伊好が私財を投じて建設したといわれている。高取伊好は地元文化・教育面に貢献したいとし、1925（大正 14）年に当時の多久村に図書館と公会堂を寄贈している。この公会堂が寒鷲亭^{かんおうてい}である。

高取伊好[1850（嘉永 3）年 11 月～1927（昭和 2）年 1 月]

高取伊好は 1850 年に佐賀藩多久領の武士、鶴田斌^{つるたひとし}の三男として生まれ、8 歳のとき姉の嫁ぎ先（佐賀水ヶ江）の高取家の養子となった。伊好は東京で法学を学んでいた長兄のもとから、1871（明治 4）年、箕作奎吾^{みつくりけいご}（秋坪）の英学塾の三叉塾^{さんさじゆく}で英学、その後、慶応義塾に移り、英学・鉦山学を学んだ。慶応義塾卒業後、官費学校の鉦山寮に入学、採炭技術を学んだのち、工部省に採用され高島炭鉦に赴任している。長崎および佐賀両県の炭鉦開発を行い高島炭坑取締役、明治唐津鉦業組合に就く。1885（明治 18）年に多久市の柚ノ木原炭鉦などの開発を行うが三菱などの大資本に買収され、また大恐慌と重なり手放すことになる。1909（明治 42）年杵島炭鉦（大町町の福母炭坑など）を買収し、大規模開発を行い肥前の炭坑王となり、従業員 5,000 人以上を抱えたとのことである。



西溪公園内にある寒鴛亭^{かんおうてい}



寒鴛亭の説明板



西溪公園内にある高取伊好像



西溪公園内にある高取伊好像



唐津市北城内5番40号にある高取邸



高取邸

参考文献

公益財団法人 孔子の里の HP:www.ko-sinosato.com

三省堂編集所『コンサイス日本人名事典（改訂新版）』三省堂, 1999 年 10 月.

新潮社辞典編集部『新潮日本人名辞典』株式会社新潮社, 1995 年 5 月.

多久市ホームページ: <https://www.city.taku.lg.jp/main/565.html>

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 (2015/11/21 14:28 UTC 版)

4. 大町町の現在・過去について

大町町の石炭は江戸時代の安永（1772～1780年までの期間）か天明（1781～1789年までの期間）にかけて石炭が発見されて以来、興廃存亡を繰り返してきたとのことである。そして、1881（明治14）年3月発行の長崎県勸業課編『鉱山沿革調』に福母村からの報告として「慶応開業し出炭額1ヶ月凡そ30万斤（180屯）採掘している」との記述があり、大町町福母の石炭の採掘が古くからなされてきたといえる^{注13)}。

杵島炭鉱〔1929（昭和4）年に北方町から大町町へ本拠を移している〕は高取伊好が創業者である。福母炭鉱は1918（大正7）年に佐賀炭鉱（当時の大谷口炭坑：杵島三坑）を大きく開発したのは大町町出身の中島徳松であり中島鉱業所^{注14)}を経営していたが、委託経営後高取伊好の所有となり、1929（昭和4）年8月28日に杵島炭鉱株式会社に改組し大町町へと移行しているとのことである。その大町町には杵島三坑および杵島四坑があり、北方町には杵島本坑および杵島二坑、江北町には杵島五坑があった。杵島炭鉱株式会社は肥前町の大鶴炭鉱および杵島五坑へと拡大していった。

昭和初期は不況であった石炭産業は、1935（昭和10）年前後から回復に向かい、杵島炭鉱は、肥前町大鶴炭業所の出炭高を併せて1937（昭和12）年の県内出炭高109万tのうち83万tで76.1%驚異的な記録を示したとのことである。1940（昭和15）年には、休止していた北方炭鉱（西坑）が1944（昭和19）年には同鉱（東坑）も再開されている^{注15)}。わが国における炭鉱は戦争と敗戦により壊滅状態で陥ったがその状況を救ったのが、「傾斜生産方式」であった。傾斜生産方式とは、GHQ（general headquarters：連合国軍最高司令官総司令部）による占領下において、当時の基幹産業である鉄鋼および石炭に資材・資金を超重点的に投入し、両部門相互の循環的拡大を促し、それを契機に産業全体の拡大を図るというものであった。工業復興のための基礎的素材である石炭と鉄鋼の増産に向って、すべての経済政策を集中的に傾斜することから、その名が付いている^{注16)}。これにより、たちまち労働者・資材が確保され、赤字補給金は、各所に行き渡ったとのことであった。掘り出された石炭は、六角川岸の土場から船積みして住ノ江港へ運び、そこから各地に送られた。福母炭鉱、三坑および四坑から土場まで軌道が敷設されていた。しかしながら、エネルギー革命とともに杵島炭鉱は、1969（昭和44）年に閉山となる。なお、杵島炭鉱に関する詳細については、『大町町史 下巻』の第8章「石炭産業」参照していただきたい。

注13) 大町町史編纂委員会編集『大町町史 下巻』大町町教育委員会内大町町史編纂室, 1987年9月. 332～333頁.

注14) 同書, 378～379頁.

注15) 同書, 388頁.

注16) 大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』岩波書店, 1969年8月. 272～273頁.

ボタ山わんぱく公園（佐賀県杵島郡大町町大字大町 4656-1）

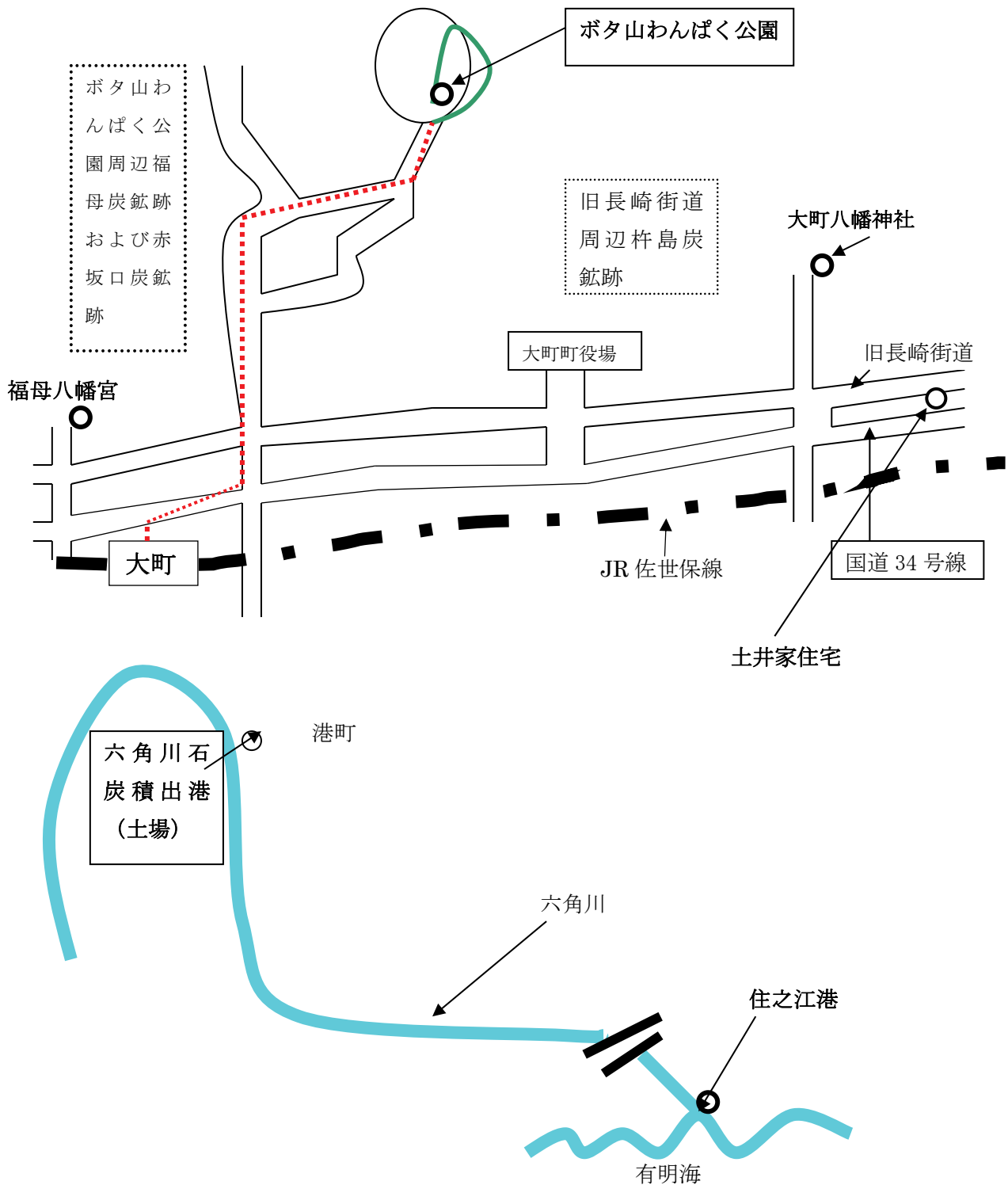
土井家住宅（佐賀県杵島郡大町町大町 1045）

大町八幡神社（佐賀県杵島郡大町町大字大町 5 6 9 2）

福母八幡宮（佐賀県杵島郡大町町大字福母 2 2 2 7）

六角川石炭船積港（大町駅近く）

六角川住之江港（六角川河口）



(1) 大町町の過去

佐賀県史編さん委員会『佐賀県史 下巻(近代史)』佐賀県, 1967年3月の写真を2枚引用している。



杵島炭を積んで六角川を往復した石炭積み船



住ノ江港の石炭積み込み作業風景(昭和初年ごろ)

(2) 大町町の現在

ボタ山わんぱく公園

旧長崎街道沿いに杵島炭鉱のボタ山を利用してつくられた多目的広場があり、サッカーグラウンド、ゲートボール場および人工の草スキー場などができるようになっている。ボタ山からは六角川の石炭積出港跡や旧炭鉱住宅を遠望できる。

土井家住宅

土井家住宅は旧長崎街道沿いにあり、国の重要文化財として1974(昭和49)年2月5日に指定を受けている。土井家の説明板によれば、江戸末期までは酒屋として建てられたが、明治初期に農家であった土井家が所有して現在に至っているとのことである。家の構造は妻入りであり、外観は町屋風であるものの、敷地面積の半分が土間造りとなっているので農家風でもあり、この地方の大型町家の一つの形態と推定されているとのことである。

大町八幡神社

大町八幡神社は、縁起略紀によれば、724(神亀元)年に宇佐八幡から勧請したとのことである。これは大町庄が宇佐八幡の荘園であったためといわれている。旧長崎街道沿いにあり、杵島第四坑が近くにあった。

福母八幡宮

福母八幡宮のご祭神は仲哀天皇、神功皇后および応神天皇であり、摂末社として13柱があげられている。13柱の5柱は景行天皇が祀っている。この八幡宮は旧長崎街道沿いにある。福母炭鉱、杵島三坑がこの八幡宮の近くにあったし、参道には寄進碑に杵島炭鉱、中島刃松が見える。

六角川石炭船積港

各炭鉱から引込み線を通じて石炭を土場（六角川石炭船積港）に運び、船で六角川河口の住之江港に運ばれ、有明海をとおって各地に送られていた。

中島徳松[1875（明治8）年～1951（昭和26）年]

中島徳松は納屋頭の家を生誕、17歳の時に伊万里地方で自営の炭坑を始めている。1899（明治32）年に筑豊地方へ出て多くの炭坑に関わり、1915（大正4）年には嘉穂郡穂波村（現在の福岡県飯塚市）で大徳炭坑を開発、これが後に飯塚炭鉱とよばれる大炭鉱に成長した。大正7年（1918）に中島鉱業株式会社を設立すると故郷・大町でも大谷口炭坑を買収して佐賀炭坑と改称、施設整備に着手している。このように、中島徳松は大町に貢献してきた人物でもある。また、佐賀炭鉱のほかに福岡県宇美町の昭和鉱業所等の経営者で貴族院議員でもあった。福岡市中央区にある料亭稚加栄は中島徳栄の持ち家を1961（昭和36）年に改装されている。福岡市早良区野芥には早世した長男や炭鉱事故で亡くなった人々の菩提を弔うために建立された徳栄寺がある。徳栄寺の徳は徳松の「徳」、栄は徳松の妻である栄子の「栄」を合わせて徳栄寺と名づけているとのこと。その名残か早良区野芥の妙見口五差路のタバコ屋さんには「お願い 切符は必ず停留所でお買い求めの上乗車前に車掌にお示し下さい：旅館 嬉野館：嬉野温泉」というコマーシャルがかかっている看板があったが、改築され今はもうない。ところで、炭鉱経営者は時代とともに変遷していくが、佐賀炭鉱中島鉱業所は杵島炭鉱（経営者：高取伊好）に買収されている。この杵島炭鉱は佐賀県肥前町の大鶴炭鉱を経営することになる。杵島炭鉱は1969（昭和44）年に閉山している。肥前町の大鶴炭鉱は現在「にあんちゃんの里」となっている。「シナリオ にあんちゃん」は日活で映画化されたときのものである。家族愛の醸成の映画で、とくに団塊の世代は学校を通じてこの映画を鑑賞している。また、著者である安本末子さんの還暦（2003年）に復刻版が刊行されている。



福岡市早良区野芥6にある徳栄寺



徳栄寺の紅葉

高取伊好

多久市のページを参照されたい。



ボタ山わんぱく公園



ボタ山わんぱく公園からの元炭鉱住宅跡



六角川



ボタ山わんぱく公園から元炭鉱住宅跡



福母八幡宮



福母八幡宮



福母八幡宮（杉島炭鋌、中島刃松の寄進の碑が見られる）



大町八幡神社



大町八幡神社



大町八幡神社



旧長崎街道の土井家住宅



土井家住宅



大町町の旧長崎街道



大町町の旧長崎街道

参考文献

大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』岩波書店, 1969年8月.

大町町史編纂委員会編集『大町町史 下巻』大町町教育委員会内大町町史編纂室, 昭和62年9月.

佐賀県史編さん委員会『佐賀県史 下巻(近代史)』佐賀県, 1967年3月.

隆慶一郎「シナリオにあんちゃん」『隆慶一郎全集 第6巻』株式会社新潮社, 1996年4月.

内山敏典『早良逍遥マップ記 — 歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ —』城島印刷有限公司, 2003年12月.

安本末子『にあんちゃん— 十歳の少女日記 —』西日本新聞社, 2003年6月.

5. 唐津・多久・大町町地域周辺の未来

本書は1～4までに見たように唐津・多久・大町町周辺地域の過去と現在の史蹟名勝等について述べてきた。本章ではこの周辺地域の未来について述べる。未来を展望する場合、これらの地域の過去と現在を含めてそれをおこなわなければならない。唐津地域の唐津藩は藩主家が6回（寺沢家、大久保家、松平家、土井家、水野家および小笠原家）も代わり、長期間による藩主家の一大支配がなかった土地柄であった。北波多の東端で相知町との境界には岸岳があり、そこには松浦党の党主波多氏によって鎌倉時代初期の築城から約450年間支配が続いた岸岳城跡があった。幡随院長兵衛もこの松浦党の関係者である。多久および大町地域周辺は、戦国時代から安土桃山時代の龍造寺氏と江戸時代の鍋島氏の影響が強く残っている。とくに、大町地域周辺は長崎街道が通っており、その街道は往時の影響が残っている。

明治期以降になると、石炭産業が盛んになり昭和30～40年代の閉山まで佐賀県の全産業の重要なウェイトを占めていた。平成の現在においては、石炭産業が盛隆を極めた時代とは異なり、本書の「まえおき」で述べているように、旧産炭地である夕張市と同様、唐津・多久・大町町周辺地域においてもペシミスティックな人口減少に基づく、少子高齢社会の進行問題を考えなければならない。ところで、夕張市は、「観光」に力を入れており、かつての炭鉱跡地を利用し、1983（昭和58）年にオープンした「石炭の歴史村」をはじめ、北海道屈指のスキー場マウントレースイ、ゆうばり国際冒険・ファンタスティック映画祭をはじめとする多彩なイベント、全国的にその名を知られる銘産夕張メロンを原料とした特産品開発、雄大な自然環境の利用など、いち早く新たな街づくりに着手、北海道に数ある元・炭鉱の街の中で、最も活性化された街として注目されているとのことである^{注17}。

一般的に、少子高齢社会における人口減少は経済システム内の生産の担い手や消費の担い手の減少ということである、そのことは唐津・多久・大町町周辺地域にも同様のことが言える。大都市はインバウンド（inbound：訪日旅行）による観光開発を目指し、民間はホテル事業への投資をおこなってきている。大都市におけるこのような投資は、インバウンドが縮小しても、都市規模の大きさからその縮小分を吸収できるものと考えられる。しかしながら、中小都市および町村は、世界および国内の経済状況などによっては、その投資が地域経済の衰退に拍車を掛けることになる。それゆえ、中小都市および町村が「町おこし」あるいは「地域振興」を計画する場合、その地域の文化遺産をベースに“身の丈に合った”観光問題を考えていかねばならない。

現在の唐津市を起点とすると、唐津駅から博多駅まで筑肥線・地下鉄で1時間31分、高速バスも唐津バスセンターから博多バスターミナルまで西九州自動車道・前原道路・都市高速で1時間12分である。唐津線で唐津駅から山本駅10分、相知駅22分、多久駅39分、久保田駅1時間1分および佐賀駅1時間15分というそれぞれの到着時間であり、筑肥線で唐津駅から西相知駅18分および伊万里駅48分というそれぞれの到着時間である。ただ本数が少ないということもあるが、移動時間の目安となるであろう。また、唐津線沿いには国道203号線が唐津市から久保田町（終点佐賀市）へ、筑肥線沿いには県道38号線が相知

町から伊万里市（終点武雄市）とそれぞれ続いており、乗用車での移動の目安となるであろう。

本章の写真で取り上げている檜原湿原（かしばる しつげん）、吉原家住宅および淀姫神社はともに、日本の原風景を示している。原風景は人によって捉え方が異なるが、共通していえることは人の心の奥底にある原初（げんしょ）の風景で、懐かしさの感情を伴うような風景といえる。檜原湿原、吉原家住宅および淀姫神社については概略図で説明する。本章では説明をおこなわないが、檜原湿原の周辺には唐津市七山の「観音の滝」、吉原家住宅および淀姫神社の周辺には佐賀市富士町の古湯・熊の川温泉郷などがある。

本書で取り上げた原風景として西相知および佐里周辺の田園・佐里温泉風景、巖木（きゅらぎ）周辺の田園・給水塔の風景、相知町の蕨野（わらび）棚田の風景、多久の平野棚田の風景などがある。このように、唐津・多久・大町地域周辺には、原風景が多く存在しわずかな遺構をのぞけば、過去にあったものを目にすることない。ただ、これらの地域の周辺にはわずかな遺構とともに目にみえない文化や歴史があり、それらが積み重なった現在があり、それを通じての将来がある。

本章で示している遺構とともに背振山間地域の檜原湿原および吉原家住宅周辺の原風景はそれらを訪れる人々の郷愁を誘うであろう。これらの原風景を壊すことなく、保護・保存と観光とをいかにするかを考えなければならない。

一般的に 1960 年代の各地域の商店街、祭りなどのアーカイブスや各地域の人口統計をみると、そこには人口の多さと子どもの多さがわかる。この年代まではエネルギーが石炭から石油へと転換していく時代であったし、第一次産業（農林水産業）における技術進歩によって産業構造が変容していく時代でもあった。そのことにより、拡大する雇用の場が存在する都会へと人口流出が起り、近年にはこの人口流出に少子高齢が拍車をかけている。

現在、いわれている「シャッター商店街」という状況はまだ商店街が存在しており、この段階でアイデアを出し活性化をしている地域商店街（徳島市のポッポ街：アニメ・ゲームなどのイベント、高松市の中央街商店街：総延長 2.7 km で日本一のアーケード商店街で、店舗を再編成し平日通行量 13 万人）がある。現在の唐津市相知町の西相知駅前的小川原商店街は跡形もなく自然に戻っている。このようなケースの地域起こしを考える場合、この地域だけでなく他の地域との相互の拡大地域を考えなくてはならない。このときに重要なことは、①それぞれの地域の“見える歴史・文化（遺構を含む）”や“見えない文化・歴史”を整理すること、②これらの地域の人口流出はどこへ流出したのかを調べるのが重要である。自らだけの地域だけの活性化ではなく、ある程度の人口規模の拡大地域が必要である。そうでないと観光客が来た場合の経済波及効果は望めない。ここからは少し経済理論的な話になるが、簡易的な波及効果を示す財政支出乗数 $\left[\frac{1}{1 - \text{限界消費性向} \times (1 - \text{平均税率})} \right]$ に

よって解説しよう。小規模人口の地域は高齢人口でその限界消費性向（＝消費の増分を所得の増分で割った値：たとえば、年間所得がこれまでよりも 10 万円増加したとき 2 万円消

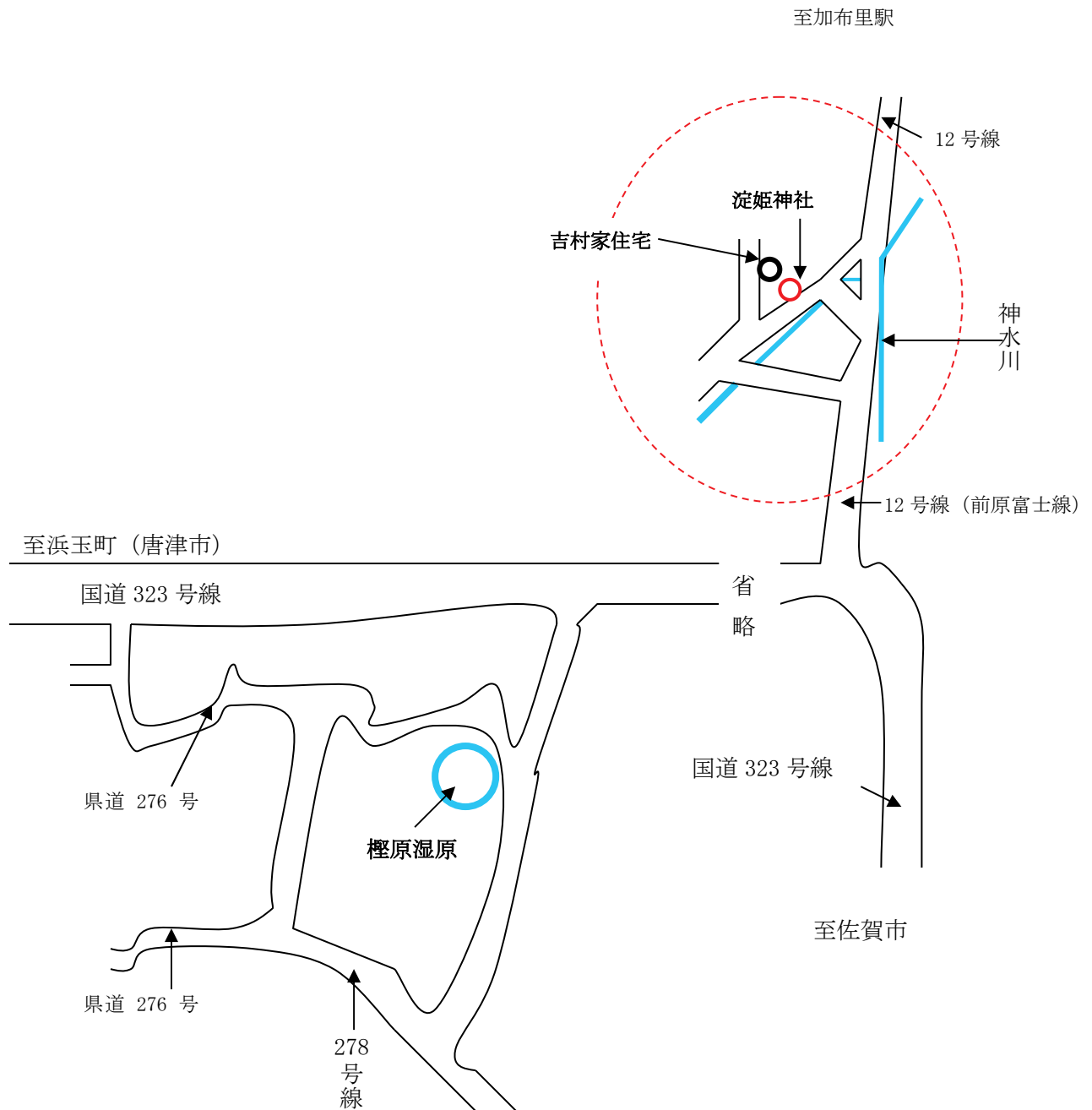
費を増やすなど)は0.2とする。平均税率(支払税額を総所得で割った値)20%(0.2:2016年の値)とする。20人観光客が訪れ、1人当たり20,000円の支出(消費)をおこなったと仮定すると、この地域での総支出額は $20人 \times 20,000円 = 400,000円$ である。この地域の財政支出乗数は1.190で、経済波及効果は $400,000 \times 1.190 = 476,000円$ で、地域の所得増加は76,000円しかない。これに対し、地域相互間交流があり一つの市場とみなすことができる拡大地域の人口は多く、そこではさまざまな年齢層の人口であり平均年齢が下がるので、この限界消費性向は0.6とする。平均税率を20%とすると、財政支出乗数は1.9231である。拡大地域であるので5,000人の観光客が訪れ、1人当たり20,000円の支出があるとすると、 $5,000人 \times 20,000円 = 100,000,000円$ の総支出額である。 $1.9231 \times 100,000,000円 = 192,310,000円$ で、地域の所得増加は92,310,000円となる。自らの地域だけでは限界消費性向が小さく、「お金(貨幣)」の流通速度が遅いため、拡大地域でなければ経済的波及効果はほとんどみることができない。

これらの拡大地域(唐津・多久・大町地域周辺)に訪れる観光客の移動手段が重要となる。ここには、行政力が不可欠であり、また各地域の「見える遺構」、「見えない遺構」を発信する地元地域の人々の育成が重要であろう。これらの拡大地域が「身の丈」の発展をすると、これらの地域から身近な地域に流出した人々(たとえば、唐津周辺から福岡市へ流出した人々、多久・大地周辺から佐賀市へ流出した人々等)が流出した地域から通える雇用の場が生まれるものと考えることができる。

檜原湿原（唐津市七山池原）

吉村家住宅（佐賀市富士町大字上無津呂 2856 番地）

淀姫神社（佐賀市富士町大字上無津呂 2844 番地）



檜原湿原

檜原（かしばる）湿原は、標高 600 メートルの唐津市七山の山間地に位置している。この湿原は「事前環境保全地域」に指定され保護されているとともに、九州の尾瀬といわれ、時としてマスコミにも取り上げられている。また、この湿原には高等植物約 350 種（県民環境部 有明海再生・自然環境課のネットでは 1,000 種類）が知られ、ガイドブックには約 240 種が取り上げての写真と解説がなされている^{注18)}。

吉村家住宅

佐賀県の代表的な山村にある吉村家住宅は、富士町教育委員会の説明によれば、1789（天明 9）年 4 月に藤原村の大工羽右衛門によって建築された家屋（農家住宅）である。建物は南面し、桁行（けたゆき）15.7 メートル、梁間（はりま）7.9 メートル、屋根は寄棟造りの茅葺で床面積 140.5 平方メートルである。内部は東に土間、床上は 5 室に分かれている。この住宅は建築から約 200 年を経過しているとのことである。間取りは東側を土間ニワ（2 連カマド、3 連カマドがある）、これに沿って 12 畳のナカエ（囲炉裏あり）をおき、この上手表側に 4 畳のナカザと 8 畳のザシキ、裏側に細長いナンド、ナカエの裏側に台所を配している。この間取りは三間取広間型系の発展した形ということである。また、屋根の葺き替えには、地元産 1,400 束の茅が使用され、1983（昭和 58）年 12 月 22 日に工事が完了したとのことであった^{注19)}。

淀姫神社

淀姫神社は、1863（文久 3）年 9 月に 1350 年祭が執り行われたとの記録があるとのこと、これから類推して 6 世紀前半継体天皇の御宇（ぎょう：天皇が天下を治めた期間）の勸請と察せられている。1561（永禄 4）年山内の領主神代勝利・長良父子は龍造寺隆信との戦いに敗れ、この地に救いを求めている。社人賀村山大和守舎種は、神代父子社内に匿くし、俄かに村民を集め大祭のための神楽を奏していた。追っての龍造寺氏の兵が探索したが、神代父子は見当たらず、社務所に火を放って去っていった。幸い社殿は焼失を免れ神代父子は無事であったとのことであった。神代は神恩に感謝して佩刀（はいとう：腰に差していた刀）2 振を奉った。のちに神崎郡三瀬に帰城するや、田 7 町 5 反余を奉納して神代家鎮護の神と仰いだ^{注20)}。この神社の境内には、1976（昭和 51）年度の登録時において、推定 300 年といわれるイチョウの木がある。



檜原湿原



檜原湿原



檜原湿原



檜原湿原



吉村家住宅



吉村家住宅



吉村家住宅



吉村家住宅



淀姫神社



淀姫神社前の水神川



淀姫神社の説明板



吉村家住宅・淀姫神社へのルートと橋の下は水神川

注 17) 夕張市ホームページ : <https://www.city.yubari.lg.jp/> より

注 18) 檜原湿原を守る会編『檜原湿原の植物ガイドブック—花の季節—』より

注 19) 佐賀市教育委員会『重要文化財 吉村家住宅—寄棟造りの農家—』(現地パンフレット)と現地の富士町教育委員会の説明板から作成

注 20) 現地の上無津呂自治会の説明板から作成

(参考文献)

檜原湿原を守る会編『檜原湿原の植物ガイドブック—花の季節—』檜原湿原を守る会, 2016年3月.

佐賀市教育委員会『重要文化財 吉村家住宅—寄棟造りの農家—』(現地パンフレット)

西川俊作『経済学 第2版』東洋経済新報社, 1979年4月.

付 録

佐賀市の史跡名勝

<http://www.ip.kyusan-u.ac.jp/J/uchiyama/saga.pdf>

副島種臣誕生地（佐賀市鬼丸町7-18 佐賀県社会福祉会館内）

枝吉神陽誕生地（佐賀市鬼丸町7-18 佐賀県社会福祉会館内）

龍造寺隆信誕生地（佐賀市中の館7 中の館児童遊園内）

乾亭院（佐賀市中の館7-11）

佐賀の「がばいばあちゃん」が住んでいた川辺（佐賀市水ヶ江3-5-20 付近）

大木喬任誕生地（佐賀市水ヶ江3-4-12 南水公民館内）

佐賀城本丸跡（佐賀市城南2-18-1）

佐嘉神社（佐賀市松原2-10-43）

松原神社（佐賀市松原2-10-43）

旧古賀銀行等（佐賀市柳町2-9）

長崎街道「のこぎり型家並み」（佐賀市八戸1 丁目周辺）

龍造寺八幡宮（佐賀市白山1-3-2）

楠神社と義祭同盟の碑（佐賀市白山1-3-2）

築地反射炉跡（佐賀市長瀬町9-15 日新小学校内）

お茶栽培発祥の地：栄西

<http://www.ip.kyusan-u.ac.jp/J/uchiyama/reisenji.pdf>

お茶栽培発祥地の碑：霊仙寺（佐賀県神埼郡東背振）

[著者紹介] 内山 敏典 (うちやま としのり)

現在、九州産業大学経済学部教授、九州産業大学大学院経済・ビジネス研究科教授

専攻：統計学, 計量経済学 担当科目：統計学, 計量経済学およびゼミナール科目 (学部)

経済・経営統計, 経済学演習, 統計・計量研究, 経済課題研究, 統計・計量 セミナー (大学院経済・ビジネス研究科博士前期課程), 柿右衛門特論 (大学院芸術研究科博士前期課程造形表現専攻)

計量経済学特別研究, 計量経済学論文演習 (大学院経済・ビジネス研究科博士後期課程)

経済学修士

博士 (農学)

主要著書

『アンケート調査に基づく専門教育科目の授業効果分析』(共著)九州大学出版会, 1989年.

『消費需要の計量的分析—食肉消費を事例として—』(単著)晃洋書房, 1992年.

『間接税改革の国際比較』(共著)九州大学出版会, 1993年.

『統計解析技法』(単著)晃洋書房, 1993年. 『消費構造の変容とその統計的分析』(単著)晃洋書房, 1995年.

『余暇関連財需要の計量的分析』(単著)晃洋書房, 1998年.

『増補 統計解析技法』(単著)晃洋書房, 1998年.

『計量分析のための統計解析技法』(単著)晃洋書房, 2002年.

『早良逍遥マップ記—歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ—』(単著)城島印刷, 2003年.

『看護統計テクニック—基本からパス分析まで—』(監修)医歯薬出版, 2003年.

『続 早良逍遥マップ記—鉄道跡を歩いて、未来に繋ぐ—』(単著)城島印刷, 2005年.

『トピックス統計解析技法—電卓, Excel および VBA における計算法—』(単著)晃洋書房, 2006年.

『基本計量経済学』(共著)勁草書房, 2006年.

『経済・心理・医療・看護等の教育のためのベーシック統計解析技法—電卓, Excel およ VBA における計算法—』(単著)晃洋書房, 2008年.

『福岡都市圏歴史散策マップ記』(単著)九州産業大学産学連携室, 2009年.

『有田・伊万里および福岡地域における消費者の意識調査分析—新しい陶磁器需要創造および生産構造をめざして—』(共著)九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター, 2009年.

『福岡 (筑前) およびその関連地域の歴史散策マップ記—とくに高取焼および元寇を例とした「まちおこし」のための文化・歴史について—』(単著)九州産業大学産学連携室, 2011年.

『柿右衛門様式学—“やきもの”の技法と歴史及び美—』(共著)九州産業大学柿右衛門様

式陶芸研究センター，2011年。
『統計解析の基礎—データ解析の基本と実践—』（単著）晃洋書房，2015年。
『旧三瀬街道とその周辺逍遙マップ記—伊能忠敬一行の測量から200年を経過して—』

（佐賀県に関連する最近の専門論文）

「地域経済動向の計量的分析—佐賀県における経済動向のケース—」（単著）『エコノミクス』第16巻第4号，2012年3月。
「佐賀県における諸富家具生産者の意識調査分析」（単著）『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』，第10号），2014年3月。
「家具・家事用品の消費構造の統計的分析—『家計調査年報』にみる伝統産業の用品の消費構造について—」（単著）『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第12号，2017年3月。

など、著書および専門論文・COE論文多数。

唐津・多久・大町地域周辺散策記
—歴史的遺産を通じて、現在・過去・未来を考える—

2017年5月2日 初版発行

著者 内山 敏典

発行 九州産業大学

〒813-8503 福岡市東区松香台2丁目3番1号

TEL 092 (673) 5215

印刷・製本 よしみ工産株式会社

〒804-0094 北九州市戸畑区天神1丁目13番5号

TEL 093 (882) 1661 Fax 093 (881) 8467

非売品

©Toshinori Uchiyama